



2023 年度

公立小松大学
産官学合同シリコンバレー研修 報告書

目 次

1. あいさつ	学 長 山本 博			1
	小松市長 宮橋 勝栄			2
2. 研修の概要				3
3. 研修スケジュール				4
4. 随任教職員の報告				
(1) 全体報告	地域連携推進センター	特任教授 真田 茂		6
(2) 課題解決の旅	国際交流センター	特任教授 岸本 昌子		11
(3) 課題達成に向けた挑戦と学生の成長				
	臨床工学科	助教 鈴木 郁斗		17
(4) 学生の成長を間近で見て	地域連携推進センター	事務局 平田 俊		20
5. 研修参加学生の報告				
(1) シリコンバレー研修	生産システム科学科	2年	市川 拓真	23
(2) 産官学合同シリコンバレー研修報告書				
	生産システム科学科	2年	今村 朱里	26
(3) シリコンバレー研修で学んだこと	生産システム科学科	2年	亀谷 尚央	30
(4) シリコンバレー研修を終えて	生産システム科学科	2年	田中 星汰	32
(5) シリコンバレー研修で学んだこと	看護学科	1年	神内 乃香	34
(6) シリコンバレー研修を終えて	看護学科	1年	土屋 心晴	37
(7) シリコンバレー研修を振り返って	臨床工学科	1年	菅野 水紀	40
(8) テクノロジーの聖地で見えた日本との差異				
	生産システム科学専攻	2年	池田 理玖	46
(9) シリコンバレー研修報告書	生産システム科学専攻	2年	井村 悠斗	51
(10) シリコンバレー研修を終えて	生産システム科学専攻	2年	岩田 伊織	53
(11) 産官学合同シリコンバレー研修報告書				
	生産システム科学専攻	2年	仙田 朋也	55

(12) シリコンバレー研修での学び、これからの活動への展望

ヘルスケアシステム科学専攻 2年 河島 遼太郎 58

6. 研修参加行政・企業の報告

(1) 産官学合同シリコンバレー研修とまちづくり

小松市役所 竹内 裕樹 60

(2) 新しい自分を創る 株式会社文教コーポレーション 三田村 耕平 68

(3) 産官学合同 Silicon Valley 研修レポート

株式会社文教コーポレーション 岩崎 直斗 70

(4) シリコンバレー研修報告書 ライオンパワー株式会社 高瀬 敬士朗 73

(5) シリコンバレーで学んだこと 株式会社味一番フード 村上 良一 75

10. 小松市長及び学長随行職員の報告

(1) シリコンバレー研修報告 小松市役所 下坂 翔太郎 80

新しい *Odyssey* のはじまり

公立小松大学 学長 山本 博

日頃本学の活動にご理解とご支援を賜り厚く感謝申し上げます。

さて、今年度も米国カリフォルニア州シリコンバレーで学生・社会人合同の研修を行うことができました。

昨年度までと大きくちがうことが二つあります。

一つは、本学の設置団体である小松市からも参加を得、「産学合同」から「産官学合同」へとグレードアップしたことです。宮橋市長とともに小職も参加し、現地で直に視察するとともに、大学と自治体という二つのレイヤーでの国際交流の意義と価値に関して在サンフランシスコ日本国総領事館等とも意見交換できました。

もう一つは、正規の参加学生枠を12名にスケールアップできたことです。これにより、学部・専攻の専門性のみならず、学士課程新入生から修士課程最上級生までと参加学年にもひろがり生まれ、プログラムの多様性と継承へのポテンシャルが特段に増しました。小松市から学生一人あたり10万円の補助をご支援いただきましたこともありがたく、今後にとって大きな弾みとなると思います。

このように、本「産官学合同シリコンバレー研修」は、今年度に至り新しいフェーズに入ったように思われます。開学早々、シリコンバレーに本学第1号となる海外オフィスを設け、プログラムの立ち上げに関わった一人として、本研修が今後、本学と地域の連携に新しい地平を切り開き、また、参加者一人一人の人生航路に有意義な実りをもたらすよう、希ってやみません。

最後に、2023年度研修にご貢献いただきました小松市、(株)文教コーポレーション、ライオンパワー(株)、(株)味一番フード、B-Bridge International社の各位に深甚の謝意を表します。

ごあいさつ

小松市 市長 宮橋 勝栄

今回で3度目となった公立小松大学のシリコンバレー研修は、行政がはじめて参加し、これまでの「産学合同シリコンバレー研修」から「産官学合同シリコンバレー研修」へ名前を改め開催されました。これは三者共創の仕組みづくりをより強固にするうえで非常に意義深い、新しいスタートになりました。

私自身、山本学長とともに現地を訪問し、在サンフランシスコ日本国総領事である野口泰様との会談やベンチャーキャピタル企業等の視察を行いました。

野口様との会談では、シリコンバレーにおけるスタートアップ企業の現状や課題について意見交換を行ったほか、小松市での創業支援施策についての話題では今後の展開への期待の言葉もいただきました。視察では、現地で働く方々の話を聞き、世界のITをリードするシリコンバレーにおいて、企業・金融機関及び投資家のネットワークの強さを実感することができました。

また、研修に参加した企業人や学生と対話する機会もありました。学生との対話から、一人ひとりに多くの気づきや学びがあり、また国際的な感覚やチャレンジ精神を育む非常に有意義な研修であったことが感じられました。小松市においても、シリコンバレーでの先進的な事例や、グローバルなマインドを活かし、引き続き地域活性化や自治体DXにつながる取り組みを推進してまいります。

最後に、現地で交流させていただいた、株式会社文教コーポレーション、ライオンパワー株式会社、株式会社味一番フード、B-Bridge International社、公立小松大学の学生、教職員の皆様に感謝申し上げますとともに、「産官学合同シリコンバレー研修」が公立小松大学の国際交流の一翼を担うプロジェクトとして今後も発展的に継続していくことを心より願っております。

研修の概要

現地の企業見学やワークショップなどの実践的な学習を通して、国際感覚を養い、学生はその経験を今後のキャリア形成や進路決定の一助に、社会人は世界をリードする起業文化に触れ、新たな事業展開やキャリアアップに取り組む機会につなげる。

また、学生、社会人がともにワークショップなどに取り組むことで、地元企業、行政の社会人とネットワークを構築しながら、地域の未来を考える。

(1) 開催期間 8月20日(日)～8月26日(土)

(2) 開催場所 アメリカ合衆国カリフォルニア州シリコンバレー

(3) 参加者 特別参加3人、本学学生12人、企業参加者5人、随任教職員4人

特別参加	小松市長		宮橋 勝栄
	公立小松大学学長		山本 博
	小松市(随任教職員)		下坂 翔太郎
学 生	生産システム科学科	2年	市川 拓真
	生産システム科学科	2年	今村 朱里
	生産システム科学科	2年	亀谷 尚央
	生産システム科学科	2年	田中 星汰
	看護学科	1年	神内 乃香
	看護学科	1年	土屋 心晴
	臨床工学科	1年	菅野 水紀
	生産システム科学専攻	2年	池田 理玖
	生産システム科学専攻	2年	井村 悠斗
	生産システム科学専攻	2年	岩田 伊織
	生産システム科学専攻	2年	仙田 朋也
	ヘルスケアシステム科学専攻	2年	河島 遼太郎
社 会 人	小松市		竹内 裕樹
	株式会社文教コーポレーション		三田村 耕平
	株式会社文教コーポレーション		岩崎 直斗
	ライオンパワー株式会社		高瀬 敬士朗
	株式会社味一番フード		村上 良一
随任教職員	地域連携推進センター	特任教授	真田 茂
	国際交流センター	特任教授	岸本 昌子
	臨床工学科	助教	鈴木 郁斗
	地域連携推進センター	事務局	平田 俊

研修スケジュール

(研修参加者)

日程	日付	曜日	時刻	内容
1	2023/8/20	日	11:00 13:30 16:25-9:50 10:30-17:00 19:00 22:00	関西国際空港集合(チャイナエアライン組) 関西国際空港 → 台湾桃園国際空港 (8/20 20:35着) 台湾桃園国際空港 → サンフランシスコ空港 (8/20 20:35着) (移動) ホテル到着 成田空港集合 (ZIPAIR組) 成田空港 → サンノゼ空港 (8/20 9:50着) The Tech Interactiveなど視察 ホテル到着
2	2023/8/21	月	8:30-9:00 9:00-10:00 10:00-11:30 13:00-16:00 16:00-17:00 18:00	【オリエンテーション】@宿泊ホテル会議室* 【市長講演】* 【みずほ銀行講演】* デジタルイノベーションマネージャーの植松氏による講演 テーマ：シリコンバレーにおけるマインドセットについて 【グループワーク】 グループごとに行きたい企業等へ訪問し、課題解決のきっかけを模索 【Apple本社/Apple Park訪問】 Apple本社でエンジニアとして勤務している秋場氏による講演 テーマ：シリコンバレーの仕事に対する考え方について ホテル到着
3	2023/8/22	火	9:00-10:00 10:30-17:00 18:30-20:30	【スタンフォード大学訪問】* 主任研究員の池野氏による講演 テーマ：スタンフォード大学医学部キャンパスの説明、起業家精神について 【施設視察・グループワーク】 前ページ記載の3企業・機関を訪問する学生と、フィールドリサーチを実施する学生に分かれて行動 【交流会】* 産官学合同シリコンバレー研修関係者の交流会@Lei Garden ホテル到着
4	2023/8/23	水	9:00-21:00 21:00	【サンフランシスコ・バイエリア・フィールドリサーチ】 課題として与えられたミッションに沿って、グループごとに行動するフィールドリサーチを実施 ・訪問先 World Innovation Lab., San Francisco Public Library, Intel museum, X(旧Twitter), Golden Gate Bridge, Salesforce Transit Centerなど ホテル到着
5	2023/8/24	木	9:00-15:00 15:00-17:00	【ファイナルプレゼン準備】 研修成果を与えられた時間内で行うプレゼンテーションの準備 【プレゼン発表会】@宿泊ホテル会議室 グループごとに研修成果やアイデアを発表。樹本特任教授による講評
6	2023/8/25	金	9:00 10:00 17:20	ホテル発 シリコンバレー周辺地域観光 (搭乗する便のグループごとに行動)
7	2023/8/26	土	1:05-(翌) 4:45 21:00	サンフランシスコ空港 → 台湾桃園国際空港 (8/27 4:45着) (移動) 成田空港解散
8	2023/8/27	日	9:00-12:50 13:30	台湾桃園国際空港 → 関西国際空港 (8/27 12:50着) 関西国際空港解散

(市長・学長・随員)

日程	日付	曜日	時刻	内容
1	2023/8/19	土	10:15 11:15-12:25 16:25-10:05 11:00-18:00 19:00	小松空港集合 小松空港 → 羽田空港 (8/19 12:25着) 羽田空港 → サンフランシスコ空港 (8/19 10:05着) 【サンフランシスコ視察】 案内：公立小松大学特任教授/B-Bridge International, inc. CEO 榎本博之 サンフランシスコの概要や歴史についての説明 ジャパントウンやベイエリア周辺施設を視察 ホテル到着
2	2023/8/20	日	9:00-12:00 13:00-17:00 19:00	【シリコンバレー視察】 案内：B-Bridge International, inc. 榎島貴昭 ・訪問先 Google, Metaなど ナババレー視察 ワイン貯蔵庫の見学、小松市の観光資源活用について検討 ホテル到着
3	2023/8/21	月	8:30-9:00 9:00-10:00 10:00-11:30 14:00-15:00 16:00-17:00 18:00	【オリエンテーション】@宿泊ホテル会議室* 【市長講演】* 【みずほ銀行講演】* デジタルイノベーションマネージャーの榎松氏による講演 テーマ：シリコンバレーにおけるマインドセットについて 【表敬訪問：野口泰・在サンフランシスコ日本国総領事】 シリコンバレーにおけるスタートアップ企業の現状や課題、小松市での創業支援政策の展開について意見交換 【Draper Nexus訪問】 北村COOによる講演 ホテル到着
4	2023/8/22	火	9:00-10:00 10:30-12:00 13:30-15:00 16:00-17:00 18:30-20:30 21:00	【スタンフォード大学訪問】* 主任研究員の池野氏による講演 テーマ：スタンフォード大学医学部キャンパスの説明、起業家精神について 【Fogarty Innovation視察】* 医療機器の開発支援する機関を視察 【Pegasus Tech Ventures視察】* ウツザマンCEO講演 【Triple Ring Technologies視察】* ベンチャー企業とともにアイデア創出、課題解決をする現場の視察 【交流会】* 産官学合同シリコンバレー研修関係者の交流会@Lei Garden ホテル到着
5	2023/8/23	水	8:00 12:20-(翌)15:10	ホテル発 サンフランシスコ空港 → 羽田空港 (8/24 15:10着)
6	2023/8/24	木	15:10-19:20 20:00	羽田空港 → 小松空港 (8/24 19:20着) 小松空港解散

*は市長・学長・随員が合同参加

事前研修について

対面・オンラインのハイブリッド型で実施

日程	日付	曜日	時刻	内容
1	7月1日	土	9:00-12:00	参加者及び関係者顔合わせ
2	7月17日	月	9:00-12:00	グループワークについて、準備事項の説明
3	8月10日	木	13:00-16:00	市長・学長・副学長の挨拶、課題解決に向けたグループワーク、準備事項最終確認

2023年 産官学合同シリコンバレー研修 全体報告 地域連携推進センター

特任教授 真田 茂

2019年9月、2022年9月、そして今年2023年8月と、3回目となるシリコンバレー研修が実施されました。また、本研修に先立って開講される「グローバル人材と持続的開発プロジェクト」という特別講座（90分×15回程度、岸本昌子特任教授）は2年目となりました。この特別講座では、「具体的な地域の産業界、行政の課題に焦点を当て、シリコンバレーの先行事例や支援体制を参考にしてプロジェクトを計画できるように、問題分析その解決方法のスキルを向上する。」ことを目的としています。この特別講座による学生たちの学びは、シリコンバレーでの学生たちと企業人との円滑な協働に極めて重要であると私たちは考えています。

この研修プログラムの目的は、現代のハイテク産業やIT産業の発展を先導するシリコンバレーのエコシステム（経済的収益、ITデータ連携などの構造）について、まずは現状を知ることと、そして、そもそも如何にしてシリコンバレーがそのような場所になり得たのかを現地で体感することです。さらに、その体験を企業人と本学学生とがグループワークの中で共有しながら様々な学びを深化することです。今回は、新たに小松市職員が参加されました。すなわち、小松市とのさらなる強固な連携を図りながら、これまでの“産学”合同研修が“産官学”合同研修プログラムして発展する節目の回であったと筆者は考えています。以下に今回のプログラムの概要を時系列に記します。

8月21日（月）

1. オリエンテーション 全員の自己紹介とスケジュール確認
2. サンフランシスコ・シリコンバレー視察のために訪米中の宮橋小松市長の講演
 - (1) 自身の政治家としての歩み、小松市の現状と将来構想など非常に興味深い内容。
 - (2) 小松駅⇄小松空港の自動運転のバス運行を計画している ⇒ 筆者、学生たちもサンフランシスコ市内において運行中の自動運転タクシーへの関心が一層高まる。
 - (3) 子供たちのための政策と高齢者のための政策の両立。
 - (4) 地元企業は大事、しかし外から企業を呼び込んで地元企業も発展できるような技術体力が重要。
- (3) 未来型図書館を創る ⇒ アカデミアの立場としても賛同。
3. 植松裕貴氏@みずほ銀行の講演

WIL (World Innovation Lab., Venture capital, but not just VC) に出向中
<https://wilab.com/>

 - (1) デザイン思考に関する講義とワークショップ。
 - (2) デザインとは「問題発見」と「問題解決」のプロセスと考え方。
 - (3) シリコンバレーは起業できる、起業実験できる場所。そして、起業の成否は技術力

と資金力が要点。

(4) すべての大改革は、一見、馬鹿げたアイデアが起源。

(5) シリコンバレーの価値の本質は、投資家、起業家、技術サポート人材のいずれも揃っている。 ⇒ イノベーションの聖地

(6) すべては自分の意志が動かす、迷ったら” ワクワク “する道を！



宮橋小松市長の講義

なお、宮橋市長と植松氏の講演には「AOKI 主催の起業を目指す子供たち：

<http://www.aoki-entrepreneur.org/index.html>」の参加中学生 12 名も同席した。中学生たちは、たとえば「苦しいけど楽しい経験だった」と各自の学びについて雄弁に語り、私たちにも大いに刺激になった。

4. 午後は、4 グループがそれぞれ分かれて予め計画していた場所を訪れた。私自身は岩崎氏チームに同行し、Steve Jobs の生家や Intel museum を訪問した。

5. 午後 4 時に Apple visitor center で、Apple のエンジニア秋葉氏と待ち合わせて、特に Apple での仕事について日本と対比しながら懇談した。



秋葉氏との懇談@Apple visitor center

8 月 22 日 (火)

1. Stanford 大学を訪問し、池野文昭先生 (循環器内科医) と懇談

- (1) 日米におけるアカデミア (学生、研究者など) の違い
- (2) 外部資金の導入力が重要



池野先生との懇談 @ Stanford 大学クラークセンター

2. Fogarty Innovation (<https://www.fogartyinnovation.org/>) 訪問
 - (1) 地域病院に併設の医療機器スタートアップのインキュベーション施設
 - (2) 医工連携や臨床試験が良好に推進されている
3. Pegasus Tech Ventures (<https://ja.pegasustechventures.com/>) 訪問
 - (1) 事業会社とベンチャーを繋ぐことによって事業拡大・新規事業を創造
 - (2) 運用総資産額 3000 億円、exit 実績 70 社、スタッフ数 125 名
 - (3) 投資先としてイーロン・マスク氏率いる“SPACE X”もあげられる
 - (4) ペガサス大学は大企業のイノベーション人材育成を推進
 - (5) スタートアップワールドカップを主宰 ⇒ Komatsu Start up Lab. にも通ずる
4. Triple Ring Technologies (<https://www.tripleringtech.com/>) 訪問
 - (1) 医療機器に特化したサイエンスとテクノロジーの共創
 - (2) 高度なサイエンスの統合によって革新的な医療機器の開発を支援
 - (3) 起業家やイノベーターが成功するための完全なリソースを提供する

8月23日(水)

1. World Innovation Lab. を訪問し、あらためて植松氏 (21 日講師) と懇談
特に、企業の創造力の強化に対してのアドバイスは、
 - (1) デザイン思考で課題解決の糸口を得る
 - (2) 今、不満なことや不都合なことを見つけようとするマインドが重要
 - (3) 仕事のために生きるのではない ⇒ 楽しく生きることの一部に仕事がある
 - (4) 人事は廻るもの ⇒ 会社 OB, OG との協調
2. サンフランシスコ視察
 - (1) 自動運転タクシーサービスの営業解禁 (8月10日) により、自律走行タクシーを街中で多数見かけた。
 - (2) トラブルや課題は未だ山積しているが、まずは先に進めるという基本的姿勢に圧倒された。 <https://wired.jp/article/robotaxis-cruise-waymo-san-francisco/>

8月24日(木)

1. 4チームそれぞれが最終プレゼンの準備

- (1) ストーリー確定
- (2) スライド作成
- (3) 発表原稿の推敲

2. 課題への取り組み結果発表会

関西のスタートアップ企業と12名のインターンシップ学生が同席し、議論にも加わった。各チームの課題と要点を以下に列挙する。

(1) 岩崎チーム(文教コーポレーション) 課題: 企業の企画創造力の不足

- ✓環境をイノベーション向けにする
- ✓マインド ダイバーシティ
- ✓やり方 アメリカ方式を取り入れてみる
- ✓企業としては、変える意識を持つことを再確認

(2) 三田村チーム(文教コーポレーション) 課題: 社員の提案・創造力の不足

- ✓好奇心が重要
- ✓失敗は成功の一過程と考える
- ✓新しい環境に身を置く
- ✓失敗を失敗と捉えない、むしろ成功に導くことかもしれない

(3) 竹内チーム(小松市) 課題: デジタルを活用した観光振興

- ✓路線バス1日乗車券の利用簡便化
- ✓スマートフォンの利用、簡易発券機の設置
- ✓アンケート調査などで具体的なデータを採取できた。
- ✓学生の発展を目の当たりにして、小松市職員として嬉しかった。

(4) 高瀬・村上チーム(ライオンパワー&味一番) 課題: フード企業におけるDX

- ✓自動化システムの導入
- ✓調理を自動化したい ⇒ いや、日本食の調理を体験できる仕組みを作る
- ✓支払いは自動化する。体験型店舗も創る

総括

1. 折に触れての報告や最終発表会の内容を伺うと、参加者は、企業人、学生ともにフィールドワークや講義・ワークショップなどで課題解決のための活発な議論を経て、また同時に個々人の関心事に対する学びも深めて着実に成果をあげました。それは、(1) 大学およびシリコンバレーオフィススタッフの3回目となる現地研修の経験とプログラムの精練化、(2) 事前の特別講座による実践的で周到的な準備、(3) 参加者の多様で強い目的意識などが相まっての結果と考えます。

2. 今回、初めての小松市職員の参加を得たこと、併せて宮橋小松市長が本研修プログラムに2日間同行されたことは極めて有意義でした。一つには市長との懇談による参加者たちの実質的な学び、そしてそもそも本研修プログラムのみならず、小松地域の産官学連携の今後の展開に大いに期待が高まったことです。

3. 同時期にシリコンバレー研修プログラムを実施していた「AOKI 起業家育成プロジェクト」の中学生グループおよび関西の起業家が率いる大阪大学などの大学生グループと一部のプログラムで合流して意見交換できたことは、本研修プログラムの参加者にとっても同じ志を抱く者たち同士、非常に良い刺激となり有意義でした。

4. 今後の課題として昨年報告した(1)参加予定者の具体的希望(訪問先、講義など)も計画する、(2)研修プログラムの計画と募集のスケジュールを早期に前倒しする、(3)保健医療科学系学生向けのプログラム新たに計画する、(4)本研修プログラム参加者による組織を作り、知識と経験を共有する、などについては、既に概ね改善されました。例えば、今回初めて訪問したFogarty InnovationやTriple Ring Technologiesは医療機材開発に特化したインキュベーション機関であり、筆者自身の専門分野でもあって非常に興味深い見学ツアーでした。一方、特に企業参加者の募集スケジュールの早期化については、研修プログラムの内容を抜本的に再考することも視野に入れて、急ぎ議論を進めているところです。

課題解決の旅

公立小松大学

国際交流センター 特任教授 岸本昌子

地域連携推進センターでは昨年につき海外研修が 2023 年度前期の PBL 特別講座「グローバル人材と持続的開発プロジェクト」との連携で実施された。今年は行政（小松市役所）からの参加も加わり「産官学合同シリコンバレー研修」（SV 研修）として、全学からの応募で 12 名の学生、企業から 4 名及び小松市役所から 1 名が参加（参加者リスト参照）し 2023 年 8 月 20 日から 26 日までの日程で米国シリコンバレーを中心に実施された。

背景・目的

公募で希望学生の費用負担（一部大学からの補助）による事業であることから、学生と共に航空会社の選定から準備、実施する形をとり出発前からの学びとした。そして研修で解決したい課題は事前に企業から出されており企業の紹介や問題に対する目的意識を持って渡し研修最終日にその解決策をプロジェクト計画としてまとめて発表するものである。

そのために①企業と行政の参加を募り、②実際の組織や社会で起きている問題を解決すべく研修内容に取り組み、③学業だけではない企業と行政の参加者の指導を仰ぎ、④学生との協働作業として現地を調査、視察をし、より現実感のあるプロジェクト計画を試みた。そして小松大学、企業及び行政との今後の連携が促進されることを期待するものである。

しかし、その設定した課題に固執することなく本研修は多くの学生にとって初めての世界、社会、人との出会いでありその新鮮な驚き、学びが学生と企業と行政の参加者の経験と 3 者の連携となることも意図するものでもある。SV 研修のプログラム（日程表参照）は米国での受け入れ組織である B-Bridge International Inc. の特任教授の榊本氏から提示された“積極的に、失敗を恐れず”参加するプログラム内容として実施された。

研修全体の流れ

海外渡航が初めての学生も多く、passport の取得、航空券の予約、米国渡航に必要な ESTA 等の申請及び各種必要なアプリの入手等の準備を学生、地域連携推進センター長、随行員及び大学の総務課と一緒に手続きを行った。それに伴う小松大学としての手続きや大学と行政の補助にかかることなど短期間にチーム一丸となって対応し、三社の飛行機に分かれて

出発することとなったが、問題なく無事研修を修了することが出来た。

今回の研修は年度当初に全学科に対しての PBL 特別講座とその後の海外研修としてオリエンテーション他で説明の機会を得、講座期間中も現地の榊本特任教授を含む数回のシリコンバレーからの特別講義を入れてコース受講者にとっては十分な問題意識を持つての参加となった。全学科対象の研修であることから参加者決定後には4人の企業及び小松市役所の参加者と合同の事前研修としてグループ毎の課題の確認と調査項目を出してグループディスカッションを行い、出発前からすでに研修は開始されていたとも言える。2023 年度の各グループの課題は、

1. 社員が新規事業を提案、創造する力が不足している①
2. 社員が新規事業を提案、創造する力が不足している②
(同じ課題であることから①②とした)
3. 小松市の観光化が遅れている
4. 社内の IT 技術が十分生かし切れていない、としグループ毎に行動及び最後のレポート作成を行った。

参加者全員に対する講義、セミナーそして全員での視察もあり全体のコミュニケーションも図ることが出来た。

到着時間は 3 航空会社それぞれ異なることから翌朝、現地でのオリエンテーションに一部参加された宮橋小松市長と山本公立小松大学学長も一緒に受けることとなり、宮橋小松市長の小松市の市政のプレゼンテーションで SV 研修は始まった。学生が直接市長から小松市の展望についての説明を受けディスカッションができる機会を得たことは有意義で小松市と大学の距離が近づく瞬間でもあった。



「宮橋市長、山本学長、みずほ銀行植松氏及び参加者全員」

その後、滞在期間中は昨年と同様に各グループがUberを使って移動し次のプログラムに参加した。榎本特任教授から、PBL 特別講座の時から失敗を恐れず積極的に挑戦することをインプットされ、日本との比較を含めて力強いメッセージがあったが、学生は最初の機会を得るのに時間がかかっている感じもあったが、一旦、歩行中、駐車場、大学での外国人との出会いで、ヒヤリングしてみると快く、明快に応じてもらえたことから最終日には多くの人たちからの意見を聞き、話ができるようになっていた。

Apple Park 訪問でアップルに勤務している日本人スタッフやスタンフォード大学では医学部の教授（日本人）から米国での働き方、なぜシリコンバレーで働いているかなど、米国の生活や日本との違いなどの講義を聞き、学生は驚きと興味をもって意見交換できた。それ以外に全体であるいはグループ毎に日本人のシリコンバレーでの取り組みも聞く機会を得ることが出来た。



「池野教授からの説明：スタンフォード大学構内にて」



「秋山アップルスタッフの講義及びディスカッション：Apple Parkにて」

学生と企業と行政の参加者とは出発前から課題の共有ができており、スムーズなコミュニケーションが研修最初からできていた。昼食や夕食もグループ毎に行った。企業からの参加者もそれぞれの学生へのサポート、指導が行われ協働作業が出来ていた。私は主に、文教コーポレーションからの参加者のグループに同行した。ベンチャーキャピタル・WiL(World Innovation Lab.)で文教コーポレーション（岩崎）グループと一緒に、先に講義を受けた植松（みずほ銀行）氏のプレゼン後の意見交換及びメンターを受ける。



「植松氏からメンターを受ける：
ベンチャーキャピタル・Wil (World
Innovation Lab.)」



「文教コーポレーショングループメンバー」

その後サンフランシスコで終日を過ごすことになるが、電車でサンフランシスコに移動し、ピア 39、Golden Gate Bridge などの観光スポットを視察後、世界的な企業の事務所が集合している地域に移動し Slack 事務所近郊、Salesforce Transit center 内の空中公園で異なる企業、グループや個人にインタビューすることが出来た。拒否されることはほとんどなく、リラックスしてインタビューを重ねた。調査のためのアポイントメントの必要性を感じた。今回は小松での事前オリエンテーションと SV 研修出発までの時間的余裕とプログラムの詳細が決まらない中で訪問先のアポイントは難しかった。



「サンフランシスコでのヒヤリング」

それ以外の日々のプログラムの詳細は小松大学総務課の平田職員から関係者へ送られているため割愛する。

研修最終日の報告会では、前期の特別講座で学んだ分析手法だけでなく参加者の文教コーポレーションの三田村社長からのプレゼン指導その他があり、学生はレポート発表に自信を持って臨むことが出来た。1 週間の学生自身の気づき、積極的な行動から得たことがしっかり分析出来ており、課題への解決法と提案も経験に即したものであった。

結論と教訓

ほぼ全ての準備を学生と関係教職員と一緒にできたことは、今後の学生にとっての海外研修、留学、インターンシップ等に有益であると考えられる。しかし、それに要する時間も膨大で次年度以降はその方法を改善したい。そのためには今後準備をより早くから進める必要があり同じ航空便で移動できることが望ましい。また SV 研修のある程度のエージェントへの委託も必要であろう。

特別講座での学びを実際に経験できる連携プログラムは課題解決のための分析の深化、調査、コミュニケーション能力などに有効である。このプロジェクト計画あるいは手法を使って実際にプロジェクトを実施できることを考えたい。そのためには、PBL 講座での課題を北陸の企業、行政の関係者から早い時期から公募し、その中から課題を選択することが必要である。企業や行政からの参加も特別講座の最初から参加し、学生との人的関係をより深く構築し、企業や行政のインプットも見学も含めてより深めておくことが、SV 研修をより充実したもの、質の高いものになると考えられる。

参加学生を全学で募集したが実際には特別講座を受講した学生が 12 名中 11 名であったが希望学生は 20 名を超えていた。PBL 特別講座期間中の課題解決のための SV 研修との連携やシリコンバレーからの特別講義に、より多くの学生に参加してもらうための工夫をして行きたい。現状では参加者の人数制限、学校の補助に限界があるものの、人数の増加、複数回実施できることが望ましい。

企業や行政の参加を促すためには、小松大学とのパートナーシップで可能なことや SV 研修で企業が希望することへの対応も個別にできる体制が望ましい。双方にとってのメリットが持続可能なプログラムにつながると考えられる。

ほぼ全員が英語能力の必要性を経験したと思うが、帰国後にそれを高めていくプログラム及び事前に英語能力向上のための英語学習プログラムがあることが望ましい。英語は一つの外国語と言うより、世界の共通語となりつつある。シリコンバレーは米国人よりもそれ以外の外国人の方が多く在住し、多くの人が母国語ではない英語を共通語として仕事をし、生活している。語学はグローバル人としての一つ的手段に過ぎない。それ以上に積極性やコミュニケーション能力の必要性、課題解決の方法及び失敗は失敗で終わるのではなく目的達成へのプロセスであることなどを実感した研修であったと思う。

米国在住の特任教授の榎本氏との連携もよくできたと感じているが、より充実した内容を実施するためには、次回は PBL 講座までの準備（課題の収集と参加企業や行政の決定）を翌年 4 月には決められるようにしたい。それによって、

1. 課題が北陸地域の小松大学協力機関から出され PBL 講座での分析が深まる

2. SV 研修への参加組織も 4 月に決まることで SV 研修までに企業と行政の参加者と学生のコミュニケーションが深まる
3. 参加企業と行政の事業紹介や企業訪問によって学生の企業と行政への理解が深まる。
4. エージェントに委託できるところは委託する。
5. 上述が可能となれば質の高い、充実した内容の SV 研修となり全体として安価にもなると考えられる。

最後に、多くの関係者のご協力によって、この連携プログラムが今年度（2023 年度）も成功裡に修了し、その目的を達成できたと考えられる。加えて今年度は宮橋小松市長及び山本学長の研修への参加もあり、行政と大学上層部に、より本企画をご理解いただき、学生と意見交換できたことは両者にとって意義深いものとなったと確信する。このプログラムを主導していただいた地域連携推進センター長に心から感謝すると同時に随行員の方々のチームワークにもお礼申し上げる。

学生の成長と気づき

臨床工学科 助教 鈴木郁斗

今年度の産学官合同シリコンバレー研修は、8月20日（日）～26日（土）に実施された。研修に参加した学部生は生産システム科学科から3名、看護学科から2名、臨床工学科から1名、大学院生は生産システム科学専攻から4名、ヘルスケアシステム科学専攻から1名、企業及び行政からの参加者は5名である。研修の基本となるテーマとしてProactiveが掲げられ、どの学生も主体的に行動することが求められた。しかしほとんどの学生が初めての海外渡航であったため、空港で集合した際は「Proactive」よりも不安や緊張と期待が混ざったような感情が前面に出た学生が散見された。入国審査については日本から対策本を持ってきたほど不安に思っていた学生もいたが、各々が懸命にやり取りして何の問題もなく入国することが出来た。現地では小松市の宮崎勝栄市長やみずほ銀行の植松裕貴様の講演を皮切りに、各グループでの課題解決に向けた視察等が実施された。

私が同行したグループは小松市役所の竹内祐樹様、生産システム科学専攻 M2 の池田理玖君と井村悠斗君、生産システム科学科 B2 の今村朱里さんの4名が所属していた。グループの課題である「デジタルを活用した観光振興」の実現のため、人々が観光先に何を求めているか、何か困った経験はないか等について図1のようなアンケートを事前に作成した。また、今後数年抜かれないような回答数50件を目標とし、人が多く集まるスタンフォード大学やサンフランシスコのベイエリアなどでアンケートを依頼した。学生は初め、英語で話しかけ

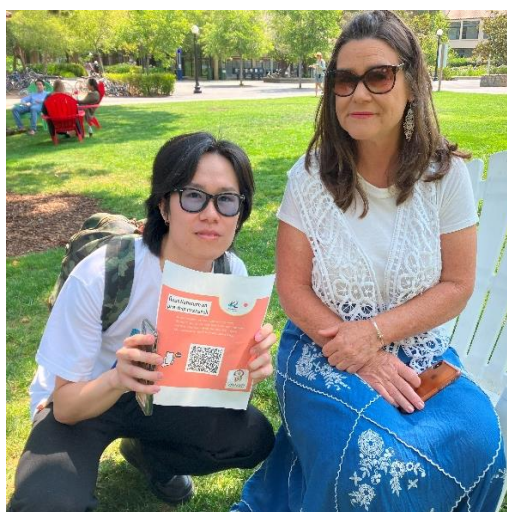


図1 作成したアンケート 図2 スタンフォード大学でのアンケートの様子

ることに足踏みしていたが、何度か回答をもらうことに成功すると徐々に積極的に話しかけられるようになっていた。もちろん回答断られてしまったり、QRコードを読み込んでも

回答に繋がらなかったり、心が折れそうになっている場面もあった。しかし結果的に1人で30人以上に話しかけた学生もあり、これはまさに研修の根幹を担うテーマである「Proactive」な行動が出来た例ではないだろうか。たった5日の研修にも関わらず、積極的に英語を話す姿勢は大きな変化の一つであり、スマホを活用しながら何とかして回答してもらおうとする姿は頼もしさすら感じた。回答数は惜しくも49件と目標の50件に届かなかったが、いずれにせよ過去最高の回答数だったように思う。上記のように、学生の健闘の甲斐あって非常に有用なデータが得られ、有用がゆえに短時間でまとめることに苦労していたが、大学院生と学部生との協働や竹内様の的確なご助言によって最終日の素晴らしい発表に繋がった。なお、アンケートに際して、私は図2のような写真を撮っても良いかと確認した程度で、多くの回答が得られたのは純粋に学生の努力によるものである。

食文化の違いを知ることもこの研修の1つの醍醐味ではないだろうか。研修中、数名の学生からアメリカ滞在で体重が数キロ増加したという声があった。日本の外食産業と比較すると何を頼んでも量が多く、サイズも大きく、フライドポテトが付いてくる料理が多いことにも驚いたようだった。知識として食事量が多いことを知らない学生はいないと思うが、それを実体験することで本物の知識が得られたはずである。中には食べ切れずに持ち帰り用のTakeaway boxをもらう学生もあり、食べ残しを持ち帰ることが当たり前である文化や持ち帰り用の箱が無料であることも新鮮だったようだ。



図3 市内を走る自動運転タクシー



図4 図書館前の展示場にて

サンフランシスコ市内では日本との様々な違いが強く感じられた。市内には自動運転タクシー（図3）が多く走っており、走行台数だけでなく、そのスピードやコーナリングなど技術的な驚きもあった。以前までは交通量の少ない夜間のみ走行が認められていたが、米国時間の2023年8月10日に日中の走行も認められたとのことであった。現状は人工知能が処理しきれない場面での急な停車など自動運転ゆえの課題は山積しているようだが、「チャレンジしてみて、適宜問題に対処する」という日本にはない試み方が刺激的だった。今回は残念ながら乗車出来なかったが、小松市でもJR小松駅から小松空港を繋ぐ自動運転バスの

導入が検討及び実証実験されているため、導入された際には是非乗車してみたい。San Francisco Public Library では米国ならではの多様性を強く感じた。正面入り口から入ってすぐのエリアに LGBTQ 関連書籍だけの本棚があり、他の階には LG 関連書籍だけの部屋も設置されていた。2022年に開館した石川県立図書館にも LGBTQ 関連書籍コーナーはあるが、蔵書数はサンフランシスコが圧倒的であった。市内には LGBTQ の方が多く集まるカストロ地区があるなど、ジェンダーに関して日本との大きな違いを感じる事が出来た。また、図書館の裏側には科学や心理学に関する各種展示物が置かれており、図4では両側にある黄色の柱を人が手繋ぎすることで音楽が流れるようになっていた。展示物が常設か否かは定かではないが、図書館は書籍による知識だけでなく、体験による知識も身につける場所という認識なのではないだろうか。

私見ではあるが、この研修における最大のメリットは自由度の高さであると考えます。事前に定められた講演や視察先以外に、グループの課題に合わせて視察先を自由に決めることができる。参加者の興味や目的に応じて視察先を追加できるため、どの学部・専攻の学生が参加しても有意義な研修となるのは間違いない。今回私が同行したグループでは例えば、前述の San Francisco Public Library や Intel museum, X 社 (旧 Twitter 社) などを自主的に追加した。私は Intel museum で見た、歴代の “intel inside” ステッカーの展示に心躍った。また、企業ロゴが看板として屋外にあるのは当たり前だが、intel のモニュメントが外にある (intel outside) のはユーモアであるようにも感じた。



図5 Intel inside の歴代ステッカ



図6 Intel outside??

最後に、研修に参加し学生を激励くださった小松市の宮崎勝栄市長、山本博学長、この研修の実施に際してご尽力いただいた地域連携推進センターの上田芳弘センター長および関係諸氏に心よりお礼申し上げます。また、社会人として参加された小松市役所の竹内祐樹様、株式会社文教コーポレーションの三田村耕平様、岩崎直斗様、ライオンパワー株式会社の高瀬敬士朗様、株式会社味一番フーズの村上良一様、学生に多くのご助言とご支援をいただき、厚く感謝申し上げます。次年度以降の研修がより一層有意義になりますように、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

新しい経験に挑戦する学生を見て

地域連携推進センター事務局 平田 俊

昨年まで「産学合同シリコンバレー研修」としてシリコンバレー（アメリカ カリフォルニア州）で開催してきた本研修は、今回、小松市職員も研修に加わり、「産官学合同シリコンバレー研修」として実施した。研修期間は8月20日（日）から8月26日（土）の7日間（5泊7日）で、企業参加者が5名、学生が12名（うち大学院生5名）の計17名が参加した。

今回は空席状況の影響で、チャイナエアラインと ZIPAIR、ハワイアン航空の3便に分かれて渡航することとなった。私はチャイナエアラインにて、学生10名の随行を実施した。研修報告の詳細は次のとおりである。

【8月20日（日）】

チャイナエアライン組は関西国際空港（以下、関空）から台湾桃園空港（以下、台北）経由でサンフランシスコへ向かった。（写真1）

関空では最初、学生たちは少々緊張した様子も伺えたが、台北に着いたころには皆が打ち解け合い、リラックスできていた。

サンフランシスコでの入国審査も全員が無事に終え、ホテルに向かい明日の動きの確認をしたのち解散した。



写真1：台北出発直前の様子

【8月21日（月）】

午前には小松市の取り組みに関する宮橋市長の講演と、デザイン思考に関するみずほ銀行の植松氏のワークショップがあった。ワークショップには神奈川県からの中学生12名も参加し、学生たちは起業家を志す若い世代からも刺激を受けていた。

午前の部が終了後、全員で集合写真を撮影し、それぞれ午後の活動に向けて移動を開始した。

（写真2）

午後は社会人1,2名と学生3名からなる4グループに別れ、課題研修がスタートした。



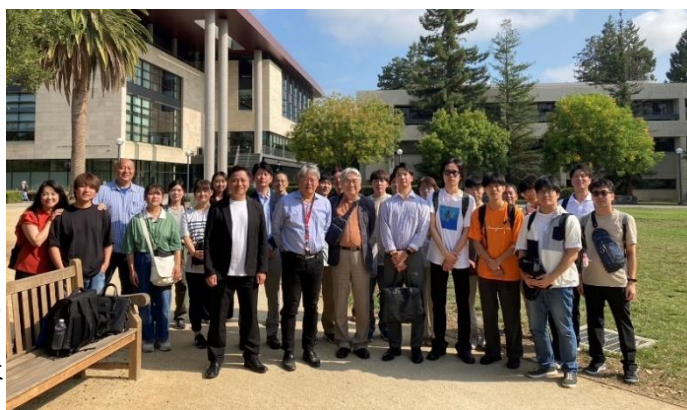
写真2：宿泊先ホテルにて記念撮影

まずは自由視察の時間が設けられ、シリコンバレーで働く人々に早速英語でインタビューを実施している学生もいた。

その後、Apple Park に移動し、Apple Park 見学後、Apple 本社勤務でエンジニアの秋場氏による講演が行われた。講演ではシリコンバレーの仕事に対する考え方や、経験談をご紹介いただいた。Apple 本社で勤務する日本人にお会いできる機会は少ないため、研修参加者は疑問点などを質問し、大変貴重な時間を過ごした。

【8月22日（火）】

午前はスタンフォード大学の池野先生より、日本とアメリカにおける学生や研究者の考え方の違いについての講演があった。学生は自身の専門分野などと絡めた質問を積極的に行い、考えを深めていた。（写真3）



午後はフィールドワーク組と施設訪問組に別れて活動した。私のグループは、社会人2名と学生1名がフィールドワークを行い、学生2名が施設訪問を行った。

写真3：スタンフォード大学にて池野先生と記念撮影

フィールドワーク組は、スタンフォード大学のキャンパス内で約30名に対して課題解決に向けたインタビューを実施した。

施設訪問をした学生2名は、彼らの専門分野である医療機器について開発支援をする機関を視察し、失敗を恐れずにアイデア創出を続けるマインドを学んだ。

【8月23日（水）】

この日は終日、グループごとに課題解決に向けてフィールドワークを実施した。

私が随行したグループは、外食産業におけるIT技術の活用に関するテーマを持ち、サンフランシスコにて視察、インタビューを行った。（写真4）

インタビューでは、22日の活動で得られたヒントから新たな質問項目も加えたり、雑談からインタビューに繋げたりするなど試行錯誤を繰り返していた。



写真4：Pier39での記念撮影

【8月24日（木）】

午前はグループごとに、研修期間中に見聞してきたことを振り返りながら、午後のファイナルプレゼンに向けた準備を進めた。

午後はファイナルプレゼンを実施した。グループごとに、活動で得られたヒントや気づきを背景に、課題に対するアプローチを発表した。（写真 5）

発表後、学生は企業あるいは行政の方からフィードバックをもらい、研修プログラムが終了した。



写真 5：ファイナルプレゼン風景

【研修を終えて】

4月からこのプロジェクトの事務局として参加しておりましたが、現地では学生の成長・活躍を見られる、とても貴重な研修となりました。私は随行教職員として、学生をサポートする立場でしたが、学生は研修を経てどうなりたいのかを考えて、毎日真剣に課題に取り組む姿に圧倒されたことを覚えています。私自身も学生から学んだことも多く、今後のシリコンバレー研修に活かすことができると考えています。

また、本研修では、企業及び行政からご参加いただいた皆様には大変ご尽力いただきました。おかげさまで、この研修を無事に終えられたこと、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

私が同行させていただいたのは、ライオンパワー株式会社様及び株式会社味一番フード様のグループでしたが、高瀬社長と村上専務を中心に全員で協力してグループ活動を進められたと感じております。

岩田くんや河島くん、菅野さんが現地の方と日に日にコミュニケーションを図れるようになっていく姿を間近で見て、シリコンバレーで学んだ積極性がとても伝わってきました。

また、本研修に参加した全学生が初めてのアメリカということで、8月25日（金）はシリコンバレー観光の時間を作り、学生主体で企画してもらいました。最初で最後のシリコンバレー滞在となる学生もいると思うので、今その場でしか経験できないことに挑戦できたことが一番の収穫だったと感じています。

最後に、本プロジェクトは多くの方々の協力があったからこそ実現できたと確信しています。私事ではございますが、入職一年目で本研修に携わらせていただけたこと、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

シリコンバレー研修

生産システム科学部生産システム科学科2年 市川拓真

1, 研修に参加した動機

シリコンバレー研修に参加した一番の理由はとにかく外国の企業に触れたい、そして生で感じたいという気持ちである。特にシリコンバレーでは起業が盛んにおこなわれ、IT 技術を軸として、発展し続けている地域である。そんな地域に身を置くことで新たな発見や刺激を得られるのではないかと考えた。グローバル化が進んでいる中で日本を飛びだし、世界視点で物事を考える力をつけることは非常に大切なことだと思う。

また、私自身の短所を克服したいということも研修に参加した動機の一つである。私の短所は相手の意見をくみ取り、自分の考えをなかなか持つことができない、また自分の意見を積極的に相手に伝えることができない点である。将来社会に出たとき、このような短所は致命的であろう。シリコンバレー研修では企業の方の話を聞いたり、現地の日本人大学生とコミュニケーションをとったりする機会が多々ある。コミュニケーションをとることが当たり前のような環境に身を置くことで、その大切さや楽しさを学び、その中で相手の意見を聞く力、そして自分の意見を発信する力を鍛えたいと考えた。

このようにシリコンバレー研修は私にとって、ただ単に知識や刺激を得るものだけではなく、短所を長所に変える重要な糧になると思った。

2, 班行動による活動

このシリコンバレー研修ではただ単に企業見学だけではなく、与えられた課題を解決するために班で活動した。私たちの班では文教コーポレーションにて実際に抱えている「社員が新規事業を提案し、創造する力が不足している」という課題を解決することを目標に行動した。シリコンバレーには日本と異なる環境、マインド、仕組みの三点があると考え、それらの違いを考えることで課題解決に向けた取り組みを行った。

環境の面で日本との違いをより強く感じたのは、WiL (world innovation lab) というスタートアップを支援するベンチャーキャピタルを訪問したときである。こちらでは出向中のみずほの植松さんと質疑応答の形式でお話をした。その中でシリコンバレーではイノベーション理論におけるイノベーターやアーリーアダプターにあたる人物が積極的に行動し、後続を巻き込んでいることを学んだ。後続の人たちが流れに乗り始めると、制度を整備し、社内で積極的にイノベーションを起こす社風を作るのである。こういったことが日本にはない環境であり、新規事業を見つけるための手がかりになるのではないかと考えた。

次にマインドの面で日本との違いをより強く感じたのは triple ring という医療系の



WiL にて

企業を訪れたときである。この企業では製品の開発を行っているが、製品の欠点を見つけるために、医療の専門家だけではなく別の分野の専門家や一般人から多くの意見をもらっているのである。多方面から意見をもらうことによって商品の欠陥を一つでもなくそうとしているのである。多方面から意見をもらうというアイデアはシリコンバレーだからこそ生まれる斬新なものである。

最後に仕組みの面で日本との違いを大きく感じたのは apple でエンジニアとして働く秋葉さんのお話を聞いたときである。日本の企業は上司の命令（ノルマや作業指示等）が部下に降りるばかりで、現場で働いている人間の意見が上に通りにくい特徴がある。一方 apple では上の人間に強制力を持たせず、それぞれの個人やチームで自発的に行動していくようなシステムを持ち合わせている。こういったシステムによって自由で斬新なアイデアが生まれるのである。

こういった環境、マインド、仕組みの観点から新規事業の開拓に向けた案を考え、スライドを制作した。大学院生の方々のスライドの作り方はさすがで、観衆をひきつけるようなスライドだった。今後のスライド制作の参考にしたいと思う。発表の場には引率の大学の先生方、hiro さんをはじめとするシリコンバレー在住の方々、日本の名産品を宣伝するために来た他大学の生徒たちなど非常に多くの方がいらっしやった。高校や大学でも何度かプレゼンテーションをしたことがあったが、ものすごく緊張した。滞りなく発表できたがもっとユニークなみんなをひきつけられるような発表ができるようになりたいと思った。

3. チーム以外での活動

私が最も印象に残ったのは植松さんの講義である。植松さんはみずほ銀行からベンチャーキャピタルの WiL という企業に出向されている方であり、みずほをよりよくするために変革をおこし続けている方である。シリコンバレーで得た知識をもとに、みずほの問題点や改善点を指摘し、新規ビジネスを仲間とともに検討したり、デザイン思考のワークショップを開いたりと様々な活動を行っている。しかし、そうした活動はすべて植松さんが独自に行っていた活動であり、初めは非難も多く、一緒に活動してくれる人も少なかった。しかしそうした状況でも植松さんはみずほをよくしたい、変えたいという思いのもと、活動し続けた結果、現在では多くの人々が植松さんの活動に賛同し、協力しているのである。そういった植松さんのお話から多くのことを学んだ。



植松さんによる講義

その中でもトライアンドエラーの精神を常に持ち続けることが重要だと感じた(実際に体現されている方なので)。失敗するのは当たり前であり、失敗を恐れずに進んでいくことが大切であるという気持ちである。こういったことは口で言うことはたやすいが、実際に行動を起こそうとすると躊躇してしまうことが多い。この研修では植松さんや hiro さんから学んだインタラクティブという教

訓をもとに企業の方に積極的に質問したり、町の人に英語で道を聞いたりした。異郷の地でこういったことをできたことは自分にとって非常にプラスになったと思う。しかしまだまだ足りないと感じることも事実である。文教の社長である三田村さんは講義の場でも当たり前のようにディスカッションをしており、テーマをより深彫りしていた。そういったことができるような人になりたいと思う。今後大学生活では自分の意見や質問を相手にぶつけるのは当たり前で、そこからどれだけ話を発展させていけるかを意識しながら生活していきたい。

5. まとめ

この研修では日本とは仕組みが異なる企業の方々に積極的に質問できたり、町の人と会話できたりと日本では味わえないような体験を何度もすることができた。そういったことを通して、自分の短所である発信する力を鍛えられたのではないかと思う。今回学んだことを日本でも継続させていけるようにこれからの大学生活を意識して生活していきたい。また、企業の方の話を聞く中で自分は知識がかなり不足していると感じた。話の中で分からない単語がいくつも出てきたからである。大学在学中の時間があるうちに本をたくさん読み、知識をつけていきたい。

6. 感謝の言葉

この研修を通して貴重な体験ができ、実りある研修になったことは大学の先生方や hiro さんをはじめとする沢山の方々の協力があったからです。私たちのためにずっと前から計画を立ててくださった大学の先生方、シリコンバレーにてプレゼンをしてくださった市長や企業の方々、私たちを導いてくださった hiro さん、taka さん、藤崎さん、班行動で大変お世話になった真田先生、岩崎さん等々本当にありがとうございました。

産官学合同シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部 生産システム科学科 2年 今村朱里

1. はじめに

令和5年度の産官学合同シリコンバレー研修は、8月20日から8月26日に行われた。

この研修の目的は企業・行政が提起する課題について、シリコンバレーという地域で企業・行政と学生が共に調査し、課題解決の糸口を見出すことである。この目的を達成するため、シリコンバレーを本拠地とする企業や大学を視察訪問し、起業家などあらゆる分野で活躍する日本人による講義を受けた。

この報告書では、私が研修の参加動機を挙げたのち、私が挑んだ地域課題、研修で実際に訪れた場所とその場所で得た気づきを報告する。また、私自身の今後の目標について述べる。

2. 研修に参加した動機

この研修に参加した動機は主に2つある。1つ目は、創造性を引き出す考え方に触れたい、2つ目は作られている製品を実際にみたいということだ。

シリコンバレーというアメリカの地域は、Apple社やGoogle社など世界最先端のソフトウェアやインターネット関連会社が集まり日々新しい技術が開発されている。そこで、日本にはない技術や、職場や学校などの環境、考え方の違いを知ることができると思ったからだ。

3. 取り組んだ課題・現地での調査方法

私は、小松市役所の方と大学院生2名、教員1名と共に小松市の観光を課題とし、「デジタル技術を活用した観光振興」というテーマで取り組んだ。

課題を解決する方法を考えるために、研修では訪問先の現地の方に観光についてのアンケートを依頼し、結果をもとに観光時に必要とされることを分析した。

アンケート内容は、観光の準備、観光の困りごと、使用する金額等の全6項目である。私たちが旅行する際、ホテルの予約や目的地などを下調べするという旅マエという行動をとることから、それについての質問をした。

調査を行った訪問先は次の3つである。

1) スタンフォード大学

2人あるいはグループで休憩している人たちに主に依頼した。



(写真1) アンケートの様子



(写真2) スタンフォード大学

2) Pire39

観光客の方々に依頼したが、英語圏以外の方も多く、そもそも言語が通じないことが多かった。また、スタンフォード大学よりも、断られることが多かった。



(写真3) Pire39

3) ジャパンタウン



(写真4) ジャパンタウン

建物の中の机で休んでいる人たち約12人に依頼した。今までの依頼から、集団かつ私と同じ性別、年代の人だと答えてくれやすいことが分かった。よって、そのような人たちを中心に話しかけた。すると、驚くことに依頼した方すべて答えていただいた。質問に答えてくださっている最中に日本に行ったことがあるか聞いてみると、1つの集団のうち半分の人が行ったことがあると分かった。ジャパンタウンにいる人たちはアンケート依頼しやすいことが分かった。

上記の3つの訪問先でのアンケート結果から、旅行中での困りごと、あったらいいものについて中心に統計をだし、小松市の旅行の際にあったら便利なサービスについて考えた。皆で話し合った結果、小松市の現状として一日乗車券を購入できる場所が少なく、よく混雑していることがあげられた。この状況を解決し、路面バス1日乗車券利用簡便化を行うために、乗車券をスマートフォンで購入を行えるようにし、簡易的な発券機をバス停に設置してクレカさえあれば購入可能にすることを提案した。

4. 研修中に学んだこと

また、研修中に現地の企業で活躍されているかたの講義を受けた。これから Apple 社とみずほ銀行の方の2つの講義から学んだことについて述べる。

1) みずほ銀行 植松氏の講義

まず、みずほ銀行の植松氏の講義を聞いた。講義で一番心に残っている言葉は、Everything break through idea looks stupid. という言葉だ。これは、ベンチャーキャピタリストベン・ホロウィッツさんの言葉で、画期的なアイデアは愚かに見えるという意味だ。この言葉から、起業し最後まで生き残り成功するのは、他人に愚かだと言われようとあきらめずやり遂げた人であるということ学んだ。

また、一見既存の企業は成功していてもイノベーションのジレンマにより倒産する可能性があるため、安定志向が必ずしもいいことではないと分かった。このことから、これから就職とき安全さを求めるのではなく、自分自身が成長できる環境に身を置くことが賢明だということ学んだ。

そして、具体的に企業が成長するにはデザイン思考の考え方をもつことが重要だと分かった。デザイン思考は、人々のニーズの観察に基づいて課題を定義し、そのうえでアイデア出し、試作、テストまでの一連の流れを行う課題解決の考え方である。このとき、ものよりコト、体験、価値観など人間中心にアプローチすることが必要だと分かった。

2) Apple 本社

次に、Apple 社で働いている日本人の方にお話をきいた。お話の中で印象に残ったことをいくつかあげる。

一つ目は、日本は一度企業に入ったら転職しにくい、アメリカは今の職場が嫌だったらやめ、いい職を求めて転職することは普通だということだ。そのために、企業側は優秀な人材をとどめるために職場環境を整えることが分かった。このことは Google 本社に訪れたときも感じた。Google には、ビーチバレー場があって、そのほかにも社員ための施設や福利厚生が充実しているらしい。

二つ目は、会社はその土地の文化、リーダーのビジョン、チームの質、産業

形態がよければ生き残ることだ。リーダーについては、研修中に行われた交流会で会社の社長に話を聞いた時も大切だと思った。リーダーは会社を映すため、リーダーは常にビジョンを持ち続け前向きでいなければならないことが分かった。

三つ目は、今私たちが働くために必要なことについてだ。一つ目は、自分の分野の技術、ものを考える能力、コミュ力をつけることだ。二つ目は小さな批判や反対にいちいち気にしない精神をつけることだ。駄目だと言われるのは前例がないからなので、自分がやりたいと思うことはまず行動に移すことが重要だと知った。そして、世界をよりよくする前に自分を幸せにすることが大切だと分かった。

5. 研修を通して得られた今後の目標

約1週間の研修を通して、主に2つの目標を得た。

1つ目は、失敗を恐れず自分自身が興味のある物事に打ち込むということだ。今まで私は、何かをやろうと思ってもリスクや失敗したときのことを考えて動き出すことが難しかった。しかし、研修を通して成功は失敗なしで生まれず、あきらめないことが大切だということが分かった。これから、やりたいと思ったことがあればまず行動に移すことを意識しようと思う。

2つ目は、大学院に行って専門性を高めたいということだ。そう思った理由は、同じ班で過ごした大学院の方々に憧れを抱いたからだ。あこがれを持った理由は、何気なく街中を歩いているときも、専門分野のことについて私が気づかないような細かい日本とアメリカの違いに気づいているところを見て素晴らしいと思ったからだ。また、プレゼン準備から発表まで手慣れた姿をみて、これは研究発表の経験を積んでいるからだとなり、私も先輩たちのように自分が行った研究を発表する経験を積みたいと思ったからである。そのため、大学で学んでいることをきちんと身に付けていきたいと思った。

また、大学内でもっと学年を超えた縦の交流があれば、私のように夢が見つかり、情報共有してより夢の実現に近づける第一歩になると感じたので、そういう場に参加したいと思ったし、作っていききたいとも思った。

6. 最後に

この報告書では、研修中で取り組んだ地域課題解決のための活動、学んだこと、今後の目標について述べた。研修後も、研修で得られた繋がりを大切にして自分自身の目標にむかって努めていきたい。

最後に、シリコンバレーでお会いした方々、また小松市役所、企業、大学の職員の方や大学院、学部生の方々、研修前から大変お世話になりました。

シリコンバレー研修で学んだこと
生産システム科学2年 亀谷尚央

参加した理由

私がシリコンバレー研修に参加した理由は2つあります。まず一つ目は、最先端が集まる場所であるので最先端を体験してみたい気持ちがあったからです。2つ目は、私は将来新しいものを開発したいという目標があったのでそのヒントを得るためにこの研修に参加しました。

挑戦したこと

せっかくシリコンバレーに来たので、何か自分を変えるために「人に話しかける」ことができるようにしようと考えました。プロアクティブになれば目標に近づけると考えたからです。到着して1, 2日は「自分なんかが話しかけてもいいのかな?」と、おどおどしていました。しかし、このままではいけないと感じ、勇気を出して話しかけに行きました。私は英語が全くできません。話し言葉はカタカナ英語でした。なかなか自分の伝えたいことを相手にスマートに伝えることはできませんでしたが、グーグル翻訳などを使い、外国人と英語でコミュニケーションをとることができました。この体験は私の中でとても大きな成功体験の一つになりました。不器用なやり方でしたが、会話をすることができました。一度の成功体験は、人に勇気をくれます。一步目を踏み出してしまえばあとはどうにかなることを学ぶことができました。



(サンフランシスコでインタビューに答えてくれた方とのツーショット)

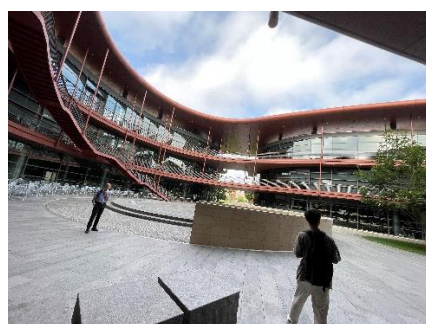
学んだこと

シリコンバレーで学んだことは、自分がしたいことをやるべきであるということです。シリコンバレーで話をしてもらった日本人の方たちは、ほとんどの人が自分のやりたいことをするためにシリコンバレーに来ていました。ほかにもグーグルで働いている社員の人と話

をしたのですが、その人も「好きなことをやってきた」という内容の話をしてくれました。私が話しかけた人、全員が「好きなこと」「したいこと」を重要にしていました。そこで、私は何がしたいのか、何が好きなことなのかを、考えました。その結果、自作ゲームを作って販売したいことが私のしたいことであるとわかりました。まだ、ゲームの作り方も何もわからない状態ですが、いつかこの文章を読んでもくれた人も知ってくれるようなゲームを作りたいです。

最後に

シリコンバレーでは、日本では体験できないようなことをたくさん体験することができました。言語はもちろん、食べ物や考え方、文化、気候など、本当にすべてのことが初めての体験で視野が広がった気がします。物の見方を変えることができれば、同じものからでも複数の発見をすることができるのでとてもいい体験をすることができました。もしこれを読んでいる小松大学生がいるのであれば、シリコンバレー研修に参加することをお勧めします。



(私がシリコンバレー研修で言ってきた場所)

シリコンバレー研修を終えて

生産システム科学部生産システム科学科 2年 田中星汰

はじめに

今回の研修は多くの大企業を生み出しているシリコンバレーに行き実際に「Apple」などの企業に行き、実際に働いている人の話を聞きたいと思い参加した。研修で様々な場所に行き感じたことを以下にまとめた。

グループ活動のこと

今回の研修では主にグループで行動した。グループ活動は、学生3人、企業の方1名で自分たちの課題を決め、研修最終日行われるプレゼン発表に向けて活動していった。課題解決のためにグループの方と話し合いをしたり、資料作りをしたりすることはとても勉強になった。私のグループの課題は文教コーポレーションの「新規事業が生まれやすくするにはどうしたらよいか。」についてだった。グループのみんなと企業に対する質問を考えたり、アポを取ったりすることはとても勉強になった。特に最終プレゼンの準備をしている際にパワーポイントの資料を作るコツを同じグループの院生の人や企業の方に教わったり、発表の原稿を自分たちで考えて、事前に企業の方に聞いてもらいながら発表のリハーサルをホテルの自分たちの部屋でしたりしたことだ。



自由視察の時に訪問した intel



アポが取れて訪問した WIL

個人でのこと

個人では、これから就活などをしていかなければならなくなってくると思い、自分の自己アピール力などが少しでもつけて、海外の企業と日本の企業の違いも見られると良いと思った。自分がシリコンバレーに行き実際に帰ってきて、大きく言うと、普通に大学に行っているだけでは身につかない力が身についたと感じた。特に、コミュニケーション力や自分が前よりプロアクティブになったと感じた。初めは企業の方などの前で発表したり自分で話

しに行ったりすることはとても緊張もしたし、難しいと感じていた。シリコンバレーに行く前、公立小松大学の教室でみんなに自己紹介した時よりも緊張はあまり感じなくなり、そこで自分なりに成長感じた。また、自分はこのような研修にあまり積極的に参加してこなかったのも、今回参加してみてよかったなと言う気持ちがあるのでまたこんな研修に参加したいなと言う意欲も出てきた。

そして、滅多に聞けない、Appleなどの企業の方々の話を聞いて、これからの自分のしたいことや、働きたい企業についてのヒントをたくさん聞いてとても充実した一週間だった。

まとめ

シリコンバレー研修を終えてやはり、プロアクティブになんでも取り組んでいくことや、コミュニケーション力がとても大切だと感じた。また、現地の人の企業に対する熱意などを聞いて、とても良い研修だった。

シリコンバレー研修で学んだこと

保健医療学部看護学科1年 神内乃香

はじめに

私が本研修に参加したきっかけは、入学時のオリエンテーション中に見たプリントです。もともと大学生のうちに1度は海外を訪れたいと強く思っていたことに加え、私が拝見したプリントに「英語力不問」と記載があったこと、また、助成金が出るという話を聞いて、なんとなく行ってみようかなと思ったことがきっかけです。なので、今、なんとなく興味があってこの記事を読んでくださっている方がいらっしゃったら、ぜひ、最後まで読んでいただけると嬉しいです。

課題解決に向けて

本研修の目的は、企業が抱えている課題を解決するというものです。私は、文教コンポレーションさんが抱えている「社員の新規事業を提案・創造する力が欠けている」という課題を解決するため、私を含む学生3人と、随行教員1名、文教さんの三田村さんの計5名でインタビューなどを行いました。初日はいざ現地の人に話しかけようとしても全く言葉も出ず、先生などが話しかけた人の話を淡々と聞くことしかできませんでした。



しかし、現地のAPPLEで働いている秋葉さんや、みずほで働いている植松さん、ほかにも様々な方のお話を聞いているうちに失敗を恐れずに何度も挑戦することが大切ということ。そして、うまくいかないことがあったとしても、その失敗を生かして次につなげていくことができれば、その経験は失敗ではなくなるということに気が付くことができました。

その後、サンフランシスコでインタビューをする際に、うまくいなくてもいいからやってみよう！という思いで挑戦できました。

そこで私は、文教さんもシリコンバレーのように、新しいことに挑戦すること。また、それに失敗したとしても次に生かし、再度挑戦しやすい環境を作ること課題解決に繋がると考えました。



インタビューをした方々

研修で経験したこと

この研修は、課題解決のためだけのことしかしていないのかと思う方も多いと思いますが、他にもたくさんのことを経験してきました。

私は今回の研修が初めての海外なので、入国審査が本当に怖かったです。しかし審査の列を振り分けている男性の方がものすごくフレンドリーに話しかけてくださったり、研修メンバーで会話してくださったりしたおかげで緊張がだいぶほぐれました。出国前に、入国手続きの練習ができるような YOUTUBE を視聴し準備満タンでしたが、実際に聞かれた質問は目的、滞在期間、何ドル持っているか、の3つだけで、あんなに準備したのに…となりましたが、無事に通過できて安心しました。

研修初日に AOKI 起業家育成プロジェクトに参加している中学生との交流がありました。この中学生にとっても刺激を受けました。考え方も私が中学生のころのような幼稚なものでなく、講義に対する質問も積極的にしている姿をみて、少しダメージを食らいました。その後アメリカの飲食店やスーパーに行きましたが、どれも想像以上のアメリカンサイズでした。そしてどれもおいしかったです。また、UVER 移動の際に、上手な英語を話すことはできませんでしたが、運転手の方とすごく会話が盛り上がったことも印象的でした。



2日目は様々なベンチャーキャピタル企業を訪問しました。冒頭にも述べた通り、この研修は「英語力不問」なのですが、これらは現地の方が英語で説明する部分が多かったためかなりしんどかったです。ですが、普段日本にいてあんな長文の英文を聴く機会はないので、とても良い経験になったと同時に、英語をもっと勉強しようと決めました。

3日目はサンフランシスコ観光とインタビューを行いました。アメリカは電車までも二階建てで大きすぎて乗っているだけで楽しかったです。日本と違い、次の駅のアナウンスがなかったり、1度しか言わないというのにも驚きました。

右写真のゴールデンゲートブリッジを実際に渡ったのも楽しかったです。



最終日は、研修結果のプレゼンと、日本の他大学との交流でした。交流がものすごく楽しく、時間があっという間に過ぎました。また、夜は同じ研修のメンバーとたくさんお話しし、修学旅行のような感じで過ごしました。これもいい思い出です。

帰国日は、飛行機の時間まで観光をしました。この研修中に、研修メンバー全員と会話をするという個人的な目標があったのですが、観光中や空港内でぎりぎり達成できたのでよかったです。

まとめ

一通り研修の内容を書き出してみましたが、経由地の台湾での食事のこと、ほぼ毎日同室の友人と反省会をしていたこと、大人も混ざって恋バナをしたこと、夜中2時まで半泣きでパワーポイントを作成したこと、などまだまだ書き切れていない思い出がたくさんあります。「百聞は一見に如かず」ですので、少しでも興味がある方はぜひ、来年度参加してみてください。私は、心からこの研修に参加してよかったと思っています。



Apple Park にて



Google 社



エド R レビン郡立公園



HAPPY HOLLOWPARK & ZOO

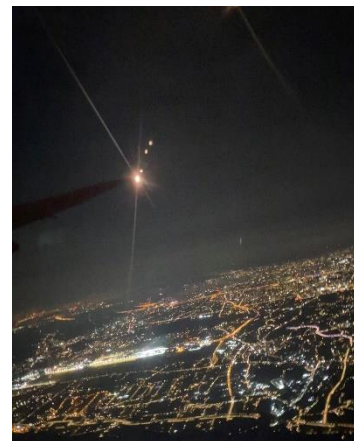
最後に、ヒロさんをはじめとするシリコンバレーの方々、市長や学長をはじめとする小松市、大学の関係者、また、参加して下さった企業の方、学生の方に心より感謝申し上げます。貴重な経験をありがとうございました。

シリコンバレー研修を終えて

保健医療学部 看護学科 1年 土屋 心晴

○参加の動機

私が研修に参加したきっかけは、「海外に行ってみたい!」という好奇心と大学一年生の間の目標として「人として成長する」ということを掲げていたため、新たな環境に身を置き様々な価値観に触れることで成長できたらと思ったことからだ。そして、研修に応募したときに周りに知っている人は誰もいないという状況でしたが目の前にチャンスがあるのにこの機会を逃したら確実に後悔すると思い「どうにでもなれ!」と応募した。きっかけにあまり具体性はありませんでしたがこの研修に参加して本当に良かった。



○研修中取り組んだこと

・グループ活動

私の班は、文教コーポレーションさんが抱える「社員が新規事業を提案・創造する力が不足している」という課題を解決するために様々な人にインタビューを行ない、回答をもとに私たちなりの課題解決方法を考えた。インタビューでは、創造力をつけるためにはどうしたらよいと思うかを中心に質問をした。回答の中で共通していたことは、新たなことを創造する力をつけるためには自分の好きなこと・興味のあることに失敗を恐れずに挑戦することであった。このことから、自分の好きなことを・興味のあることであれば新たなアイデアが生まれやすくなるのではないかと考えた。よって、課題解決方法の一つとして社員に仕事を割り振る際にいくつかの選択肢をあたえて社員に仕事を選んでもらうようにすることを提案する。そうすれば、社員は自分の好きな仕事をするため結果として提案や創造しやすくなるのではないかと考えた。また、グループメンバーからは新たな環境に身を置くこと・失敗を失敗と思わないようにするという提案が出た。インタビューからそれぞれ異なる課題解決方法が考えられ非常に面白かった。また、インタビューしていく中で3人の積極性も向上し4日目に訪れたサンフランシスコ内の空中公園では自分たちと同じ世代くらいの7人グループや仕事上の警察官にもインタビューすることができた。7人グループの人たちとは写真を取り合ったりする仲になれてすごく楽しかった。



研修前は、去年SV研修に参加した人から「インタビューしようとして何回も断られた」と言われ不安に思っていたが私たちのグループはこの研修期間中インタビューはほぼ百発百

中でOKしてもらえた。インタビューに答えてもらうコツは、自分たちのことを相手に知ってもらうこと、いきなり本命の質問を聴くのではなく簡単な質問から聞くこと、笑顔とハイテンションで話しかけに行くことである。次回の研修に参加しようと思っている人は参考までに。

・Uberにて

Uberは、一般の人が運転する車に目的地まで乗せてもらうという配車サービスである。左ハンドル・右側通行・片側6車線の道路は新鮮で面白かった。日本ではまだあまり普及していないテスラにも何度か乗ったが天井が全面ガラス張りでカーナビもすごく大きくてカッコいい！と思っていたが3列目のシートは身動きが取れないくらい激狭で足首を九十度に曲げないと座れないのが辛かった。また、Uberに乗車するときは毎回誰かが助手席に座らなければならなかった。はじめは、ためらいがあったが一度助手席に乗ると日本では運転手しか座ることができない右側の席でワクワクし運転手さんから地域の情報などを教えてもらうことができ楽しかった。

・英語力

研修中に感じたのは、「英語に自信がないから話さない・海外に行きたくない」と思うのは本当にもったいないということである。今までは「英語を話せるか」と聞かれたら私は「まあまあ」と答えていたかもしれない。でも、実際に現地に行ってみると文法とか気にせずにとにかく伝えようという気持ちがあればインタビューやレストランでの注文、ホテルのチェックインなどでも英語に関して困ることは全くなかった。困るところか英語が通じた瞬間はすごく嬉しかった。この経験から、英語は自分が話せると思っていれば話せる！ということを学んだ。今度、「英語を話せるか」聞かれたらYesと答えようと思う。

・最終日の発表会

最終日には、それぞれのグループの成果をプレゼンテーションする発表会があった。その発表会に使用するパワーポイント作成する際に私たちのグループは、どのように構成を作り、話せばいいか分からなくなってしまった。そんな時に大学院生やグループメンバーである三田村社長がプレゼンテーションの「イロハ」を教えてもらった。今まで私はパワーポイントを作ることが得意だと思っていたが院生や社長に私が知らなかった知識をたくさんもらえ、とても勉強になった。グループメンバーの2人と協力し、最後にホテルのプールサイドでリハーサルをしたのは今ではいい思い出である。発表会では、外部の人も大勢いたが堂々と発表でき終わった瞬間はすごく達成感があった。このプレゼンテーションから得られた学びは今後大いに生かしていきたい。最後に夜遅くまで私たちに付き合ってくれた院生・三田村社長、ありがとうございました。

・おまけ

食事に関しては、ハンバーガー・ステーキ・ピザ・Mc&Cheese・Fish&Chips などアメリカなもの全制覇できどれも最高においしかった。ハンバーガーに関しては何回食べたかわからない。私の中では、サンフランシスコで食べたクラムチャウダーが格別だった。日本に帰国してからはだしの味が恋しくなった。アメリカのハンバーガーがあまりにもおいしかったため日本のハンバーガーが未だに食べられずにいる。次、ハンバーガーを食べるときはアメリカのモノを食べたいと思ってしまう。



○まとめ

今回の研修では、上記のようにたくさんの学びがあった。単なる好奇心から参加した研修であったが、その「単なる好奇心」から踏み出す一歩が大切だと研修で学んだ。始めた理由は単純なことでもいいと分かれば、あとは行動に移すのみである。不安に思うことでもとりあえずやってみればどうにかなるということの特に最後の発表会に向けてグループメンバーと話しているうちに思うようになった。また、研修中将来私がどのようにしていくかを考えさせられた。研修と一緒に参加した様々な立場の先輩方と話していくうちに看護学科だから看護師にならなくてはいけないというのはただの一つのルートでしかないということであり、私は何にだってなれるし好きなことをしていいと思うようになった。私が今後どうしていきたいかはこれからしっかり考えていきたいと思う。

○最後に

研修前からたくさんお世話になった随行の職員の皆様、私が知らなかった企業や行政、社会のことを教えてくださった学長、企業・市役所の皆様、学部生の相談にたくさん乗ってくれてたくさん笑わせてくれた大学院生の皆さん、一週間共に過ごした学部生、そしてグループメンバーの三田村社長・岸本先生・亀谷さん・神内さん本当にありがとうございました。

シリコンバレー研修を振り返って

保健医療学部 臨床工学科 1年 菅野水紀

1はじめに

I)参加動機・活動目標

私は将来、臨床工学技士の資格を持ちながら、医療機器の研究・開発に取り組みたいと考えている。そこで、世界の最先端の技術が集まるシリコンバレーに行き、どのようにして0から1を生み出したり、革新的なアイデアを思いついたりしているのかを自らの目で見てみたいと思い、参加に至った。

また、私は小中高と小さなコミュニティに属しており、価値観や考え方が凝り固まっている気がしていた。そのため、大学では能動的に活動して色々な人と価値観を共有し、十人十色な人々を受け入れられるようになるとともに、聞いた話をもとに自分を顧みて成長につなげようと考えていた。このことから、自分から話しかけて、多くの人と多種多様な話をしてみようと目標を立てた。加えて、今まで私は周囲の目を気にして積極的に発言しなかったり、自分が望まない周囲の望む選択肢を選んだりすることが多かった。最近ではこう行動することはだいぶ減ったが、まだ一步踏み出せていないことが多かった。それに伴い、一連の研修を通して、疑問に思うことや気になる音があれば、その好奇心に従って行動してみようと心に決めた。



図1サンフランシスコ国際空港

II)現地での調査について

私は“チーム味一番フード&ライオンパワー”で、味一番フードさんには、スタッフの効率的な配置・料理品質の安定化・サービスの均一化ができていない、という課題を頂いた。そこでシリコンバレーという土地の特色を生かしてIT化という観点から意見を提案させていただき、現地では“飲食店の作業の効率化に伴う運営内容の一部自動化”について調査をした。



図2サンフランシスコ郊外にて

2シリコンバレー現地での研修について

I)企業訪問

プログラム内の現地の企業訪問では医療機器関係のスタートアップ企業を支援する“Fogarty Innovation”と“Triple Ring Technologies Inc”、スタートアップ企業とグローバル企業に資金援助するとともに、双方の企業の橋渡しを行っている“Pegasus Tech Ventures”の3つを訪問した。それぞれの企業で印象に残っていることをまとめていこうと思う。

Fogarty Innovation	<ul style="list-style-type: none"> ・スタートアップ企業に無償でオフィスと医療機器を貸出 ・ビルの中に企業と病院が併設されている、かつ近くに病院があるため実証実験がたやすい。
Triple Ring Technologies	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい医療機器を開発するとき、医療従事者だけでなく、患者さんなどの実際に利用している方々からも意見をもらう。その後、研究者と共に、技術者や資金提供をする企業など、その機器の開発に関わる全ての人と意見を交わして研究を進めていく。
Pegasus Tech Ventures	<ul style="list-style-type: none"> ・スタートアップワールドカップを開催しており、その企業に対して資金援助をするとともに、大会を通じて一流企業とのネットワークを設けさせる。

特にFogarty Innovationに関しては“トライ&エラー”の精神を大切にしていると感じた。「企業当初というのはなんせ資金が足りないため、実験・研究をする前にまず資金調達をしなければならない。それでは何も前に進まないから上記のような運営を行っている」という話を聞いて、それなりのリスクを伴うにも関わらず、見返りを求めないで、ただその頑張る姿勢に対して援助を行うというやり方に感銘を受けた。挑戦するより前にリスクを考えてしまいがちだとされる日本人的思考からすると、少し不安もある。しかし、最近この考え方になった私は、確かに怖いけれど、とにかく経験を重ねていつか絶対に役に立つと思って行動することで、のびのび動けるし、思わぬところで点と点がつながって、新たな発見をすることもできた。

まだまだ日本の企業に関してもよく分かっていない程未熟なため、難しかったり理解できなかったりしたこともあった。しかし、CEOの方に実際に出会って直接お話を聞くという貴重な経験をすることができて本当に良かった。あアイデアの出し方も聞けたため、今後の参考にしていきたいと思う。

II) スタンフォード大学訪問



図3 James H Clark Center

2日目にスタンフォード大学を訪れた。信じられない程広大な敷地で、まるで一つの町だった。そして、学内の施設のほとんどが研究者からの寄付金によって設立されているということにも驚いた。どれだけ研究が大事で、アメリカの方々が大切にしている人脈が多大な影響力を持っていることを改めて実感した。私は企業訪問に行きたかった為ゆっくり見学することができなく残念だった。また機会があればゆっくりと訪れてみたいと思った。

III) 班活動

ア：Google 訪問(1日目)

予約をしていなかったため内部を見学することはできなかったが、ビーチバレーコートがあったり、恐竜のオブジェがあったりと、遊び心溢れるユニークなオフィスを見ることができていい経験になった。



図4 Google 本社

イ：サンフランシスコで調査

3日目は、宿泊先のサニーバレーからサンフランシスコの中心地に移動して、街中でインタビューを行った。私は自分の英語が通じなくて相手に迷惑が掛かったらどうしようと思って、先輩方は自分から進んで話しかけに行っているのにできなかった。でも今日こそはと思って勇気を振り絞って何とかインタビューをすることができた。初め、お時間ありますか、と“Do you have time?”で聞いたところ、時間を教えてください方もいて、“Do you have the time?”と聞き間違えられたのだと思って残念にも感じたが、見知らぬ人から話しかけられたからそう聞こえたのだろうと思い込むことで、失敗を恐れずに何度でも挑戦できた。



図5 インタビューを行った
Pire39

また、ゴールデンゲートブリッジを訪れたときに一人で来ていた女性の方に写真撮影を頼まれた。私は撮影した後、せっかくの機会だからと思い、思い切ってお話してみ

ることにした。すると向こうの女性も快く応じてくれて、出身地や旅行日程の話をする
ことができ、たわいもない会話だったけれどとても有意義な時間だった。今まではそ
の一步が踏み出せずに、あの時こうしていればと後悔することが多かったから、1枚殻
を破れたようでうれしかった。

IV) 交流活動

ア: 秋葉寛さん (Apple)

1日目 Apple 本社に勤務する秋葉寛さんのお話を聞いた。秋葉さんは本来別の企業に勤務
したかったが落ちてしまい、たまたま Apple に
応募したら受かって、充実していた為結果として今まで働き続けているというお話を聞いた。
私も似た経験をしていたためそのお話がとても興味深かった。その後、B-Bridge の美和さん
とお話する機会があつて、自分もそういったことがあつたということ伝えた。すると、“私



図6 Apple 本社にて

もなんやかんやしていたらアメリカに来ていたし、自分が最初に決めたことが絶対の
正解じゃなくて、結局その置かれた場所でどう頑張るかなんだよね”とお話してくださ
った。その言葉で、周りが何と言おうとその状況下で自分は充実した時間を過ごす！と
意気込んでここまで来た自分が認められた気がしてとても嬉しかった。他にも先のこ
こに至るまでの色々な思いや経験を聞いて、今までの経験も全く失敗ではないし、自分
はまだ色々な選択肢を持っていて、何にでもなれるんだと実感した。今を全力で駆
け抜けること、そして自分のやりたいことを追求できる将来を考えていきたいと思っ
た。

イ: 池野文昭さん (スタンフォード大学)



図7 スタンフォード大学にて

スタンフォード大学で教鞭もとる池野さん
に今までの経歴や大学の特徴などをお聞きした。
スタンフォード大学は社会人学生も多く所属し
ており、何歳からでも学びなおしはできるとい
うことをお話していた。実際池野さんも就職後
に留学したそう。今ではスタンフォードで主任
研究員となっている池野さんだが、研究者と認
めてもらうために、初めの頃は論文を書きまく
っていたという。私はその時、医療機器に関して
研究をしたいと考えている自分の甘さを実感した。池野さんは今でこそ医療機器関連

の企業をしたり、日本とアメリカを行き来して日々お忙しく活動をしていらっしたりするみたいだが、私はまだそこまでの熱量やどんなふうにも社会に貢献したいという思いをもっていないと思った。まだ何にでもなれるからこそ多方面にアンテナを張って、自分が追求したいと思えることを見つけて、そこからの道を考えていきたいと感じた。

ウ:学生交流

1日目にはAOKI財団の中学生と交流した。ものの見方も驚く視点からであったり、すでに自分を確立しているような話し方をしていたりして開いた口が塞がらなかった。直接意見交換をすることができなく残念だった。

どの中学生も自分に自信を持っている姿が見られたが、この自信は日頃の自分の頑張りから裏付けられているのかなと考えた。学びの知識や理解度をもっと高めて、まず自分自身の意見を、自信をもって話せるようになろうと思った。

4日目には日本のご当地規格外食材を用いて商品開発を行う大学生とピザ会をした。何気ない趣味や今回の研修の話を共有するくらいだったが初めて出会う言葉やものばかりで驚きと学びの連続だった。正直、アメリカに来てまで日本の学生と話すことに関して違和感を覚えていた。しかし、逆に言えば、普段の生活では絶対に交わることのない方々と交流することができる貴重な経験だと感じた。

エ:ファイナルプレゼンテーション

同日、現地調査の結果を報告した。PPTを作るところからとても苦労したが、同じ班の先輩方が教えてくださったため、自分の学びにもつながったし、良いPPTに仕上げることができた。この経験をこれからの発表の場に活かしていこうと思う。

また、ほかの班の発表も研修の実体験も含めて企業に意見を提案していたり、情報収集にGoogle Formsを活用していたりと各班の個性が見られ、掘り下げ方も様々で、似た問題に関して取り組んでいた班も全く異なる調査結果が出されていて興味深かった。

3 所感

今回のシリコンバレー研修で最も印象に残っていることは日本人と話したことである。日本に居る時にいくらでも話せるのになぜこう思ったのか。それは、一緒に過ごしていくうちに、この人たちなら絶対に自分の発言に対して正面から向き合ってくれて話してくれると思えたからだ。出会って話す人全員が自分の気持ちに正直に恐れず話していて、でも自分の意見を押し付ける訳でもなく、自分の経験をもとに話してくれた。形容しがたい安心感とそんな素敵な人たちともっと話をして自分自身をもっと良くしていきたい気持ちで溢れていた。そして最終的にはアメリカという、失敗を恐れない風土に背中を押されて行動に移すことができた。



図8ゴールデンゲートブリッジにて

正直、せっかくアメリカに来たなら、もっと土地柄や国民性に影響を受けられたらまた違う発見が出来たのかなと思う。しかし、私はまだまだ未熟で自分の価値観や軸が定まっていないからこそ、身近だけど普段と同じ生活を送っていたら会うことのできなかつた日本人の方々から良い刺激を受けることができたのだと思う。目標に掲げていたことに挑戦出来て本当に貴重な経験になった。この経験や思いを大切に、これからの日々の生活、そして人とのかかわり方に活かしていきたいと思う。そして、次海外に行くことがあれば、次はもっと外国の方々とお話してさらに柔軟な思考を持つことができるよう努力していきたい。

最後に、今回の研修に関わってくださったすべての皆さんのおかげで、安心安全に一生の思い出に残る素敵な研修を終えることができました。本当にありがとうございました。

テクノロジーの聖地で見えた日本との差異

サステイナブルシステム科学研究科 生産システム科学専攻

池田 理玖

8月20日から25日（現地時間）の6日間、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ・ベイエリアに位置する、シリコンバレーで研修を行った。私自身、今回の研修が初の海外であり、事前準備からすでに高揚していた。事前のPBL講座は論文の締め切りとスケジュールがバッティングしてしまい、すべて参加することができなかったが、参加者確定後に行われた事前説明会には3回とも参加でき、現地担当のB-Bridge International Inc. の榎本博之特任教授をはじめ、我々の研修に協力してくれる引率教員や参加企業の方々と交流することができた。事前研修から榎本特任教授には常に「Proactive（積極的に）行動しよう！」と言われており、自己紹介や質疑、意見などはProactiveに発言しようと心がけていた。普段から地声が大きく、自分の意見は発言する正確であり、その性格は今回の研修にはとても適していたと、研修後に改めて感じたところである。

今回の研修のテーマとして、「企業の課題を学生と共に解決する」というミッションがあり、私は小松市の竹内さんのチームへの配属を希望し、チーム竹内として、「デジタル技術を駆使した観光復興」というミッションを決め、シリコンバレー研修で訪れるスタンフォード大学でアンケートをすることにした。アンケート内容は事前にGoogle Formsで作成し、現地ではQRコードを提示する方針にした。研修の詳細は次のとおりである。

初日（20日）は、事前に早め早めの行動のおかげで、ZIPAIRでのサンノゼ空港直通便エアチケットを購入することができたので、20日の11時30分頃にはサンノゼ空港に到着することができた。午後からサンノゼにあるテックインタラクティブ（以下、テック）、ウィンチェスターミステリーハウス（以下、ウィンチェスター）を見学し、ウィンチェスターの後に、近くの散策スポットである、サンタナ・ロウに行き、サンノゼ屈指の観光スポットを直接見に行った。

テックに向かうためにUberをハイヤーした際、テスラが到着した。まずサンノゼについて一番驚いたのはテスラの数。日本では見ることないほどの台数が街中を走っており、また、EVバスもかなり走っており、すでに電気自動車へとシフトしているなど感じた。同時に日本車はそれ以上に多かったので自動車産業ではまだまだ日本の地位が確立されていると感じた。テスラに乗った際、スマホのナビアプリがディスプレイに表示されていたが、通信表示が「5G+」になっていた。日本では5Gすらエリアが限定的で、まだまだ4Gが主流であるのに対して、すでに一步先に進んでいて、これがシリコンバレーだなと実感させられた。すぐ5G+について調べたが、詳細がほとんどなく、世界的にもまだまだその存在すら知られていないものだと理解した。

その後、テックやウィンチェスターを訪れたが、正直、テックは子供向けの施設で、最先端技術が展示されてはいなかった。ウィンチェスターもこれと言って心に残った学びや発見はなかった。ただ、サンタナ・ロウに直結しているため、観光地として成り立っている感じであった。そして、サンタナ・ロウはサンノゼを代表する観光スポットで、ショッピングや食事が充実しており、お店の前にもテーブルとイスがたくさんあり、いろいろな人がお酒を交わしながら交流したり、ミュージシャンが演奏をしたりと、日中からとてもにぎわっていた。そして日本の観光地との違いとして、ごみ箱の数。日本だと、食べ歩きスポットなどはゴミを捨てる場所がなく、ごみの処分にとっても困るのに対して、サンタナ・ロウやその周辺はごみ箱から別のごみ箱が見えるくらい至近距離にたくさん設置されており、便利だなと思ったし、実際、ごみ箱が多いからか、捨てられているペットボトルなどがほとんどなかった。日本でも、埼玉県の川越の食べ歩きスポットでは深刻なごみ問題を解決するために、別店舗で購入したもののごみでも受け取るという取り組みを始めているため、それが全国的に広がれば観光が活性化されると思った。

2日目(21日)は、ホテルでオリエンテーションを行い、その後、小松市長の講演、Mizuho USAの植松氏に「デザイン思考」のレクチャとワークショップを行った。この際、AOKI財団のプログラムに参加していた横浜市の中学生団体が合流し、一緒にワークショップを行った。まず市長のお話では、市長の経歴や小松市の現状の子育て制度や、今後の事業などについて講演していただいた。今回私は、小松市の課題がテーマであったので、この講演でより現状を把握することができた。特に、今後、北陸新幹線が小松駅に止まるため、より観光に力を入れる必要がある。小松の特徴として、空港と主要駅が近いということ。これを活かして、小松駅と小松空港を自動運転EVバスでつなげるプロジェクトが現在進行中であることを知った。自動運転に関しては日本の法律が厳しすぎてまだまだ試験運用すらハードルが高いのが現状である。しかし、サンフランシスコでは8月10日に自動運転タクシーの商用運行を認可した。自動運転車両がすでに公道を走っているため、日本との違いは何なのか、どのようなスピードで、どんな止まり方、曲がり方、車間距離はどうか、それらを自らの目で確認する必要があるなと思った。

植松氏のデザイン思考のレクチャでは、実際に中学生とペアを組み、「コップ」をデザインするワークショップを行った。相手が今朝飲んだ飲み物、何と飲んだのか、いつ飲んだのか、なぜその飲み物を選んだのか、毎日飲むのかなどヒヤリングし、その人に適したサービスを含んだコップを提案するという流れ。実現可能性とかは一切問わない、発想力を養うようなものであり、とても難しかったし、短時間で相手の習慣や課題を読み取り、具体化するという経験は学生時代にはなかなか経験し



図1 Meta Headquartersにて

ないことであり、とてもいい経験になった。そして同じことを中学生が行っていることにとても感心した。

午後からは Meta Headquarters に行き、その後、Apple Park Visitor Center にて、Apple で Mac OS の GUI 開発に従事している、秋場寛氏に質疑応答の時間を作ってもらい、たくさん質問することができ、考え方や、アメリカから見る日本など、我々とは全く別視線の意見をいただきとても刺激になった。

3 日目（22 日）はスタンフォード大学を視察したのち、Googleplex, Intel Museum を訪れた。スタンフォード大学で Medical Director である池野文昭

氏のお話を聞くことができた。私は今回の講演の中で池野氏が最も印象に残っている人である。とてもパワフルで、何事もはっきりと意見を述べており、何より長年スタンフォード大学で競争し続けてきたという絶対的な自信に満ち溢れており、すごく刺激的で、もっといろんなことを聞きたかった。

その後、ランチタイムを利用し、スタンフォード大学内で事前に作成した QR コードを手でアンケートを行った。最初は話しかけるのも勇気が出ず、弱気になっていたが、初めて話しかけた人が快く承諾してくれたのがきっかけとなり、結果的にスタンフォードでは 10 人ほど承諾していただくことができた。Googleplex は中に入ることはできなかったが、現在の言語系や画像系の AI モデルの基盤となるアーキテクチャを開発した Google の本社を直接見ることはできたことだけでも満足感はすごかった。

夜は、今回の研修に参加しているメンバー全員で食事会が行われた。そこで初めて、自分以外のグループの企業の方々と交流することができた。小松市長とも政治に関する話もできたし、市長の企業のトップの会話はとても興味深かった。



図2 アンケート用紙

4日目(23日)はCaltrainに乗り、サンフランシスコに移動し、観光スポットであるPier39に行き、再びアンケートを行った。まず、電車に乗る際、日本よりIT化が進んでいるのと思ったが、自動改札もなく、正直、駅や電車に関しては日本がかなり進んでいるのかなと感じた。サンフランシスコ駅でも駅員が目視でチケットを確認しており、無人化できるのになぜしていないのか、とても気になった。その後、Pier39でアンケートを行ったが、観光地ということもあり、なかなか快く承諾してくれる人がいなく、また、英語がわからない人も多く、苦戦した。しかしなんとかここでも10人ほど承諾していただくことができた。しかし、よりアンケートの回答数が欲しかったため、サンフランシスコにあるJAPANTOWNに行き、引き続きアンケートを行った。ここでは声をかけた人全員が快くアンケートを承諾してくれた。やはり日本に少なからず好意がある人たちであったのか、日本の大学生をいうと反応が良かった。結果、11人に承諾していただいた。

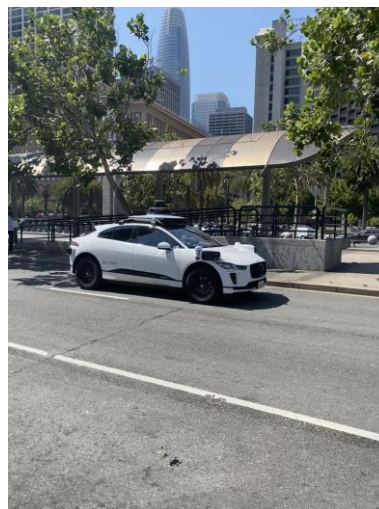


図3 自動運転車両

その後は、私の希望で、X(旧Twitter)の本社を見に行った。研究でツイートを収集し、分析を行っていたのでとても興味があり、直接見ることができてよかった。

5日目(25日)は、午後の成果発表に向けて朝からチームでパワポ作成を行い、その後、今回の研修参加者、別プロジェクトでシリコンバレーを訪れていた大学生団体、現地で企業を目指す起業家などに対して成果発表と懇親会を行った。現地起業家の方に、発表を褒めていただき、また貴重なお話をさせていただき、とても刺激を受けた。他大学の学生ともSNSでつながることができたので、今後、日本でコミュニティを形成できれば今回の研修はより成功になるのかと思う。

総括

今回のシリコンバレー研修で、驚いたこととして、すでに5G+が導入されていたこと。そして自動運転車両がすでに公道を走行していたことである。通信速度が向上することで、車両間の情報やりとりもよりリアルタイム性が向上し、自動運転の安全性が向上する。シリコンバレーを含むサンフランシスコは最先端研究の実験場のような感じがした。Uberで移動中、何気なく運転手に、「I have the same car」と会話を始めたとき、「Japanese driver's license is very difficult to get. So, you're great! It's

very easy in America.」と言われ、日本に対して疑問が浮かんだ。難しい試験をクリアした人達が運転している日本で、自動運転がまだまだ法律によって規制され、簡単な試験をクリアした人たちが運転しているアメリカでは自動運転がなぜ認められているのか。自動運転車両の周りを走行する車両が難解な動作をする確率が低い日本でももっと積極的に導入すれば、自動運転先進国になれるのと思ったし、今後、小松市が計画している自動運転バスプロジェクトも、このサンフランシスコの現状をしっかりと知っていただければ、今回のテーマ、「デジタル技術を駆使した観光復興」が実現できるのではないだろうか。

謝辞

産官学合同シリコンバレー研修に参加するにあたり、公立小松大学の職員の皆様および小松市、企業参加者、B-Bridge International Inc.の皆様、参加学生諸氏には終始一貫して、暖かく親切丁寧なご指導ご鞭撻を賜りました。中でも、研修全般に渡り、多大なご協力とご支援を賜りました小松市総合政策部 竹内裕樹氏、公立小松大学保健医療学部 鈴木郁斗助教に心より感謝の意を表しますと共に厚く御礼申し上げます。

公立小松大学地域連携推進センター長 上田芳弘教授、公立小松大学地域連携推進センター 真田茂特任教授、B-Bridge International CEO・公立小松大学 榎本博之特任教授、公立小松大学 岸本昌子特任教授、公立小松大学地域連携推進センター 平田俊氏には、研修に関するご協力とご支援だけでなく、研修での心構えについてご指導を賜りました。深く感謝する次第であります。

最後に、本研修への深いご理解とご協力を賜りました公立小松大学 山本博学長、小松市 宮橋勝栄市長に心より感謝申し上げます。

シリコンバレー研修報告書

サステイナブルシステム科学研究科
生産システム科学専攻 2年 井村悠斗

1. 研修に参加した動機

海外の文化や考え方に触れることで視野を広げ、新しいアイデアを創出するための考え方を身に着けることで、自身の研究や将来のキャリアに活かしていきたいと考え、シリコンバレー研修に参加した。

2. 活動内容

私は小松市役所グループに所属し、小松市の観光を活性化させることを目的として活動を進めた。具体的には、シリコンバレー周辺の観光地で Google Forms によるアンケートを実施し、その結果から小松市の観光活性化のための方法を提案した。

3. 学び

今回の研修を通じて、私は「失敗を恐れず試行を重ねるべき」であることの重要性を学んだ。

日本では失敗しないための入念な準備が重視されるが、シリコンバレーでは失敗は次への一歩であり、失敗をどう活かすかが重視され、チャレンジこそが何よりも称賛される。特にそれを実感したのが、サンフランシスコの昼間の車通りが多い中を、自律走行車が一般車とほぼ同等の速度で走行している光景を目にした時だ。私たちがアメリカに到着する10日ほど前である2023年8月10日に、カリフォルニア州は市当局者や一部住民からの反対を押し切り、自動運転タクシーサービスの営業運行を承認した。自律走行車による事故や渋滞等のトラブルは発生しうるものとしながら、自動運転技術の発展や競争優位性確保のために、このような強行的とも思える判断を行う点は、シリコンバレーの「失敗を恐れず試行を重ねるべき」という価値観を象徴しているように感じた。

私は研修活動時、この「失敗を恐れず試行を重ねるべき」という価値観の重要性を特に実



アンケート実施時に使用したチラシ



街中を走行する自律走行車

感じた。シリコンバレー周辺の観光地を訪れ、現地の観光客に英語で話しかけ、アンケートを依頼した。私は、日本でさえ見ず知らずの人に話しかけるということが大変躊躇する人間であり、海外の人に英語で話しかけるということは大きなハードルとなった。なんとか自身を奮い立たせ話しかけてみるも、多くの「No」をいただいた。しかし、試行を重ねるごとに、どのように話かけたら良いか、どうしたらわかりやすく伝えることができるか等のコツを掴み、最終的には十分な量の回答数を得ることができた。

いま振り返ってみれば、普段の私が日本で行っている研究活動においても、実験方法をただ検討し続けるのではなく、不完全でもとりあえず試しに実験してみることで、新しい解決のアイデアを見出してきた。しかし、それを普段の生活や行動に活かすことができていなかったことに気づいた。今後は、「失敗を恐れず試行を重ねるべき」という考え方を意識すると共に、経験を振り返り応用していくための広い視点を持ちたいと思う。

とはいえ、日本の失敗を恐れるような価値観は、言い換えれば丁寧な仕事をしているとも捉えることができ、日本とシリコンバレー双方の価値観を尊重する必要があることも忘れないでいたいと感じた。

4. 最後に

今回の研修にて、大変貴重な体験ができました。随員職員の方々をはじめとする、大学職員の方々、小松市職員の方々、b-bridgeの方々、参加企業の方々には、多大なるご尽力をいただいたことに心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

シリコンバレー研修を終えて

サステイナブルシステム科学研究科生産システム専攻 2年 岩田伊織

参加したきっかけ

私は今、人工知能や IT を使用した研究を行っており、その分野の最先端の機関や人々が集まる地域に実際訪れ、空気に触れてみたいと思った。また、自分の進路として、博士課程への進学を希望しており、今後国際会議などの海外での活動が増えるため、その足掛かりとして、海外で活動したいと思ったから。

1日目

1日目はまず、市長とみずほで働いている植松さんのお話を聞いた。市長のお話では小松市で今、どのような改革が行われているのかを改めて聞き、自分は今小松市で活動しているが、今後も小松市で従事していきたいと感じた。また、植松さんのお話ではデザイン思考についてであった。普段自分たちが何気なく考えている考え方にプラスして相手が何を求めているのか短時間で聞き出していくことの大切さを学んだ。自分の研究分野は移り変わりが激しく、スピードが求められるため、この思考法が大いに役立つと感じた。

次に、アンケートを取るために、Google へ行った。社員さんに話を聞くために、建物に入る交渉、日本人スタッフと話せないのかをセキュリティの人々に聞きまわった。ここでの学びとして、真剣に聞き、自分が何をしたいか、どのような人物なのかを明かせば、多くの人が親身になって、いろいろ考え、答えてくれることが分かった。

次に Apple に行き、Mac のデザインを手掛けている秋場さんとの対談を行った。秋場さんのお話では自分が行っている研究へのアドバイスをいくつかいただいた。自分はその研究がどうお金になるのか、をあまり考えずに行っていたが、今後研究を続けていくためにはマネタイズも大切なので、そういった面にも着目していきたい。



2日目

2日目はスタンフォード大学に行った。まずは、スタンフォード大学で働いている池野さんにお話を聞いた。

その後、スタンフォード大学にいる学生やスタッフや観光客に、レストランの工程（接客、配膳、調理、片付け、会計）のうち、どれを自動化、機械化するのが良いかのアンケートを取った。最初はいきなり声をかけていた。その問いかけでは、答えてくれる人が半分くらいで、残りの半分には断られていた。しかし、途中から方法を変え、最初に自分は日本から来た大



学生であること、何のためのアンケートなのかを先に説明することで、ほぼすべての人にアンケートに答えてもらうことに成功した。合計で30人程度の人に答えてもらった。結果は会計に票を入れた人が最も多く、接客など本来人と人が顔を合わせて会話する部分は票が入りにくかった。日本であっても、街頭でアンケートを取る際はこちらの事情を明かすことで、回答率が上がるのではないかと感じた。

3日目

3日目は pier39 という観光スポットに行き、アンケートの続きを行った。また、お昼にアメリカの一風堂に行き、レストランで働く人々相手にも、日本食の人気さと、意見を聞いた。ここでもやはり、接客は人がすべきだとの意見が多くあった。

この2日間では主にアンケートを行った2日間であったが、現地の人々のやさしさに特に触れる2日間であったとともに、自分の英語力を図るとても貴重な機会となった。特にリスニングは問題なかったが、話せない単語があり、今後の勉強の指標が見つかった。

4日目

今回の研修の発表会が主なイベントとなった。私たちのグループは味一番フードさんの課題である IT 化が進んでいないという課題点の解決の糸口としてアンケートを取り、まとめた。発表後は同じく日本からアメリカに来ていた日本人大学生との交流会を行った。自分たちで食べ物の発案を行い、販売を試みる学生たちで、挑戦していくマインドや、自分には無い、挑戦を続けていく、ひたすら進んでいく姿は大変貴重な学びになった。

まとめ

今回の研修では、まず、挑戦をいろいろ工夫しながら続けていくことの大切さを学んだ。もともと新しいことに挑戦することは好きで、日本にいるときから新しいことや環境に飛び込み、いろいろなことをしてきたが、あまり長く続かなかった。しかし、今回の研修を通して、課題があったとしても、違う方法を考え続けていくことの大切さを学んだ。また、普段接することのないたくさんの人々とかかわり、とても多くの刺激を受けるとともに、いろいろな考えを学ぶことができた。

産官学合同シリコンバレー研修報告書

サステイナブルシステム科学研究科生産システム科学専攻2年 名前 仙田 朋也

1. 目的

私が本研修に参加した理由として主に2つある。1つ目は現地の空気感や人に触れたかったからである。シリコンバレーは常に新しいものが生まれる地として有名である。シリコンバレーではどのようにして新しいものが生まれているのか、それについて実際に現地において環境や人に触れることで知ることができると考えた。2つ目は、英語を話さなければいけない環境に身を置くことである。日常的に英語に触れる機会はあるが、積極的に英語でのコミュニケーションを取る環境ではなかった。そのため、英語を話さなければいけない環境に身を置くことで、英語力を上達させたかった。以上が本研修に参加した理由である。

2. 研修の内容

本研修では、いくつかのグループに分かれてそれぞれが課題を持つ。この課題を現地での活動を通じて、どのように解決していくかを考えていく。研修名にある通り、本研修は産官学の合同で行なわれ、それぞれのグループには学生と企業の方もしくは行政の方が参加している。わたしの所属するグループには株式会社文教コーポレーションから岩崎産が参加しており、文教コーポレーションさんが抱える課題である「社員が新規事業を提案し、創造する力が不足している」に取り組んだ。これを解決するヒントを講演、企業訪問、フィールドワークを通じて得ることを目指す。方針としては、課題が新規事業の提案を促すことを目的としているため起業家やそれ関わる企業にあたりを見つけ、新しいことに挑戦する上での環境、マインド、仕組みに着目した。研修は移動などの日程を除くと主な活動は4日間行なわれた。以下に1日目から4日目に行なった内容についてまとめた。

2.1. [1日目]

研修の1日目は、小松市長である宮橋市長の講演やみずほ銀行から現地の企業に勤めている植松裕貴さんによる講演が行なわれた。市長と植松さんの講演の際には、本研修の参加者だけでなくAOKIの起業家育成プログラムでシリコンバレーに来ていた中学生が参加していた。市長の講演では、市長になるまでの自身の生い立ちや、現在進めている政策などについて話された。本講演の内容で特に印象に残ったのは「クラフトバレー」という小松を含めたいくつかの都市による地元のものづくり産業を世界へ発信する事業である。名称はシリコンバレーにならったものであり、各都市が連携のもと地元産業は発展させていき、地域の活性化を目指すものである。この事業は地域の活性化の点において、非常に興味深くぜひとうまく軌道にのってほしいと思った。植松さんの講義では、自身の経験をもとにシリコンバレーにおけるマインドについてとデザイン思考に触れられた。植松さんの経歴やシリコンバレーにおけるマインドは、日本で普通に生きてきた自分にとっては衝撃

的であった。行動力とリスクに対する考え方が大きく違っていると感じた。リスクを恐れずにとにかく行動する、そういった考え方が根付いているため次々に新しいことに挑戦できているのだと思う。本講演ではデザイン思考についても軽く触れ、簡単な演習を行なった。お題を元に1対1で会話を行い、相手が抱える課題を発見しどのようにして解決するかを考えるといった内容である。私の演習相手はAOKIのプログラムに参加していた中学生であった。中学生ではあったが非常にしっかりとしていた印象を受けた。その方とのやりとりを経てお題に沿った相手が抱える課題を発見しその解決案を模索した。研修初日ということもあり、非常に新鮮な気持ちで終始気持ちが昂ぶっていた一日であった。

2.2[2日目]

二日目は、現地企業とスタンフォード大学に訪問した。訪問企業はPegasus Tech VenturesとTriple Ring Technologiesの2つの企業であった。スタンフォード大学では、大学に勤めている池野文昭先生に現地での大学の雰囲気、考え方や大学の周辺施設などについて教えていただいた。スタンフォード大学では25歳以上の学生が2、3割ほどを占めているとおっしゃっていた。このことは日本では非常に珍しいことである。このことから現地の人々のチャレンジ精神の高さを感じた。スタンフォード大学訪問後は、Pegasus Tech Venturesに訪問した。Pegasus Tech Venturesはベンチャー企業を支援するベンチャーキャピタルと呼ばれる企業である。この企業は有名なSpace Xも支援している。この企業ではstartup world cupという起業家のコンテストを主催している。Tripe Rin Technologiesは医療系のベンチャーキャピタルである。技術系の企業であり、訪問時は様々な機器を見せていただいた。ここでは今までの講演や企業訪問とは違い、英語でのやりとりが主となった。質問も英語で行なうため、文章を考えるのに大変苦労した。

2.3[3日目]

三日目は、グループワークということで課題解決に向けて一日目で講義を行なっていた植松裕貴さんが代表を勤める株式会社willに訪問し、グループ課題解決に向けていくつか植松さんと質問を交えてお話をした。ここではより私たちの課題に沿って話を深掘りしていった。特に社員に積極的に動いてもらうための環境についてお話を伺った。伺った内容の中で特に課題解決において重要であると感じのが、「積極的に動ける人間を自由に動けるようにする。」である。これはイノベーター理論に基づく考え方で、まずイノベーターやアリーアダプターといった新しいものにいち早く飛びつくことのできる人が積極的に動ける環境を作る。これによって、社内において積極的な活動を行なう雰囲気が作られ、イノベーター理論における後続の分布に属する人たちも釣られてより積極的に活動するようになるというものである。これは本グループの課題解決において非常に有用な考え方であると考えた。これが積極的に新規事業を生み出すための環境ではないかと考えた。

2.4[4日目]

四日目はこれまでの研修でそれぞれのグループの結果をまとめ、発表する日であった。グループで発表内容とスライドを試行錯誤し、社会人である岩崎さんに様々なフィードバ

ックを頂いた。半日ほど準備を行い発表に挑んだ。私たちのグループは、最初に述べたように新規事業の提案促進のために新しいものが常に生まれ続けるシリコンバレーにおける環境、マインド、仕組みに注目し、様々な場所への訪問や様々な方とのやりとりを経て得た知見を元にそれぞれについて内容をまとめた。発表は多少詰まる場所があったものの伝えたい内容は伝わったと感じた。他のグループの発表はとても刺激的だった。課題が違うため現地での活動が違うのは当たり前ではあるが、他グループが初日からどのような行動をとっていたのかを知ることができ面白かった。

3. まとめ

本研修に参加したことは自分にとって非常に良かったと思う。研修中は日本ではできない体験ができ、終始新鮮な気持ちで研修に挑めた。参加した目的であった現地で活躍する人やその人が身を置く環境を知ることができたと思う。訪問した企業それぞれにおいて、事業についてお話を聞くだけでなくそこに勤める方々とのコミュニケーションを行なうことができ、よりリアルなお話を聞いた。現地企業訪問は普段やりたくてもできることではなく、大変貴重な体験をさせて頂いたと思っている。また、休憩や移動時は現地の人々とコミュニケーションが行え、現地での生活の空気感を多少知ることができたと思う。お店において英語で買い物が行えたときは非常にうれしかった。楽しいことだけでなく悔しい思いもこの研修では多くした。研修に参加した他の人と比べると自分は積極的に動くということができていないと感じることが多かった。また、英語によるコミュニケーションにおいてもうまくいかないことが多かった。特に入国時の税関では想定より苦勞し出鼻をくじかれた。研修の序盤から非常に悔しい思いをした。これらは研修後の自分の課題として解決に取り組んでいきたいと考えている。本研修を通して現地で活躍する比値のマインドを知ることによって積極的に動くことの重要性を実感することができた。本研修で経験したことは今後の自分にとって大きな財産になると思う。

シリコンバレー研修での学び、これからの活動への展望

サステイナブルシステム科学研究科 ヘルスケアシステム科学専攻
修士課程2年 河島遼太郎

[研修に参加した動機]

1つ目は、研修プログラム内の訪問先に医療関係の企業が多くあったことです。私は、新しい医療機器やそれらを開発している環境に非常に興味があるため、ぜひ自分の目で見てみたいと考えていた。

2つ目の動機は、新しいことを始める、いわゆるイノベーションを起こす原動力に触れてみたいと思っていたことです。私は普段の研究活動で、何か新しいこと・おもしろいことを研究してみたいと考えているが、実際は結果の予測やコスト面に気が取られてしまい、どうしても始めの一步が踏み出せずにいた。そこで、新しいプロジェクトがいくつも起こされ、淘汰され磨かれているシリコンバレーでは、どのようにはじめての一步を踏み出しているのかということを知りたいと思い参加した。

したがって、私は、新しい技術がどのような背景・環境で生み出されているのか、イノベーションの原動力とは何か、そして、はるばるアメリカに行くからには現地の方と積極的にコミュニケーションを取り、できるだけ多くのことを吸収して帰国しようと心に決めて参加した。

[体験]

ここでは、シリコンバレー研修を通して、特に印象に残っている体験を紹介する。

① TRIPLE RING での講義にて

研修内で現地企業(TRIPLE RING)の見学に訪れた際の出来事だ。
訪問先の技術者様のお話が終わった後、私は質問をしようとして準備していたが、いざその時が来ると考えていた英語が飛んでしまい言葉が詰まってしまった。日本で同じようなシチュエーションに遭遇すると気まずい雰囲気が流れると思うが、その技術者の方は、私の目を見て待ってくださり、真摯に私と対話をしようとして努めてくださったのである。その時に出てきた私の英語は片言でとてもつたなかったと思うが、その技術者の方は、私の質問の意図を正確に汲み取って下さり、適格に回答してくださった。早く質問をいいきらねばと焦っていた私にとって、その技術者の方の振る舞いは救いであり、同時に日本では感じる事のなかったコミュニケーションに対する姿勢を感じた。

② グーグル本社での聞き込み

2つ目は、フィールドワークの中で、Google 本社に訪れた際の出来事だ。

私のグループではロボットアームを見学したいという目的で訪問したが、警備員に尋ねたところ、1か月前にアポイントメントを取る必要があり Google 社内を見学することはできなかった。しかし、研修に同行していただいた企業人の方に促され、私たちは他の警備員や敷地内を歩いている Google スタッフに聞き込みを繰り返し、最終的にはロボットアームを作っている建物を特定することに成功した。正直なところ、私は、聞き込みを続けながらも「何故、社内には入れずロボットアームも見学できないとわかっているのに聞き込みを続けるのだろう」と疑問に思っていた。しかしながら、私はその建物にたどり着いた時、得られた結果は当初求めていたものとは違ったが何か達成感のようなものを感じ、一度失敗しても自身のやりたいことに向かって努力し続ける大切さを味わった。

[気づき、発見]

以上2つの体験やフィールドワークでの現地の方々との触れ合い、そしてグループメンバーと課題の解決に向けて議論し合った経験から、私は新しいアイデアが生まれるコミュニケーションを学ぶことができた。具体的に言うと、まず相手の意見に耳を傾け、相手の意見の中で気になったことは否定から入るのではなく質問や提案をする等をしてより深く議論し、一方で自分の意見もしっかり持ち相手に伝えることも大切であると感じた。このように複数の人が意見や考え方を共有し合い、1つの目的に向けて努力する姿勢こそが新しいアイデアを形あるものにしていく原動力であると学んだ。

また、先ほどの Google 本社での成功体験もあり、帰国してからは公私問わず自分のやりたいこと、目標に真摯に向き合うことができている。

さらに、現地の医療関係の企業を訪れ実際の開発現場を見学させてもらい、私が普段から囲まれている設備とあまり大差ないことを知り、今の私は失敗を恐れる事よりも、失敗から学ぶことに重点を置いて研究活動に従事できている。

[まとめ]

最後に、今回の研修では、日本で生活しては経験できないような体験・雰囲気・マインドを経験することができた。今後は、この経験を糧に自身の目標・やりたいことに実直にまい進していきたいと思う。

産官学合同シリコンバレー研修とまちづくり

小松市総合政策部スマートシティ推進課
兼市長公室未来型図書館づくり推進チーム
主査 竹内 裕樹

2019年（令和元年）より「産学合同研修」として開催されていた当研修は、コロナ禍もあり、今回で3回目の実施となったが、市長と共に行政として初参加をさせていただき、「産官学合同研修」として開催された。

所属しているスマートシティ推進課ではデジタルを活用した市民生活の向上と自治体DXを担当しているため、世界のITの最先端を走るシリコンバレーでの研修は、業務との親和性も高く、ご案内を頂いたその時から非常にワクワクし期待に胸を膨らませていたことを覚えている。

1. 事前学習

シリコンバレーについての学びやスタートアップをはじめとする新たな製品・サービス開発、起業においてグローバルな視点を養うことなどを目的とした講義「グローバル人材と持続的開発プロジェクト」（全8回・講師：岸本昌子特任教授）に、学生と共に参加させていただき事前学習を行った。

また、小松市からはデジタルに関連した取組や課題を学生に発表し、その後ワークショップ形式で、シリコンバレーで取り組む課題やその解決方法について議論を行ってきた。

そのほか、榎本特任教授（B-Bridge International Inc.）によるオンライン講義などを受講し、シリコンバレーにおけるマインドセット／スキルセットについて事前学習を行った。

班での課題を選定するにあたり、行政が抱える地域課題は多種多様であり、かつデジタルを活かすことを前提としたものであったためか、学生にとって身近で馴染む分野が少なかったように感じた。

最終的に決定した課題 ⇒ 「デジタルを活用した小松の観光振興」

2. 現地での研修

【1日目】

旅行需要等の回復により、学生全員の航空チケットの手配が叶わず、初日は4名（生産システム科 市川 拓真君・サステイナブルシステム科学研究科生産システム科学専攻 池田 理玖君・地域連携推進センター 真田 茂教授）による研修となった。

まず、事前に4人で行先を決めていた The Tech Museum of Innovation を訪れた。

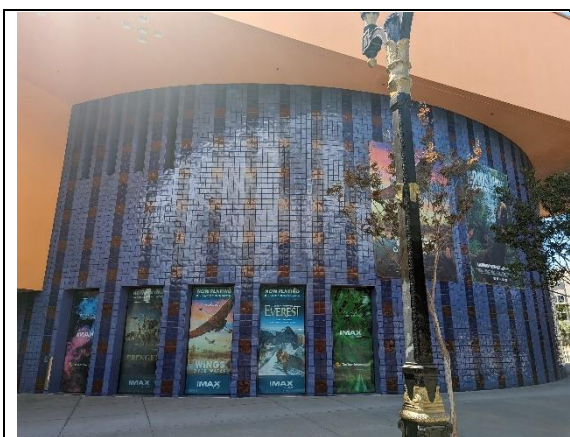
案内看板によると、Tech はサンノゼ市と約 300 の企業の寄付から設立されており、来館者自身が体験・探求を通し、先端技術に触れる多くの展示がなされていた。

企業と地域共同体の協力、科学技術をアクティブな体験を通して学べるという点で、コンセプトはサイエンスヒルズと近いものを感じた。

次に訪れたのは、ディズニーランドのホーンテッドマンションにも影響を与えたといわれる 歴史的建造物 Winchester Mystery House である。

ガイドによると、娘と夫を突然の病気で次々と亡くした薄幸の未亡人、サラ・ウィンチェスターの屋敷で、銃ビジネスで巨万の富を築いたウィンチェスター家を襲う不幸は、亡くなった人々の霊によるものと考え、除霊のために 38 年もの間、増改築を繰り返していたということだった。

部屋数 160・ドア数 2000 枚を超え、除霊目的のためか、無意味なドアが多数あるなど異様で奇妙な作りが多かった。



The Tech Museum of Innovation



Winchester Mystery House

【2日目】

いよいよ参加者全員が無事集合し、オリエンテーションでの自己紹介を皮切りに、市長講演やシリコンバレーにあるベンチャーキャピタル・Wilに出向中の植松裕貴氏による「シリコンバレーのマインドセットについて」と題した講義や「デザイン思考」の実践的ワークショップを実施した。

印象的だったのは、スタートアップが集積するシリコンバレーでは、日系企業はコンセンサスの遅さからあまり歓迎されない、つまり、意思決定が遅くビジネスチャンスを逃してしまうという話であり、自治体職員としては特に共感できる内容であった。

そのような中、植松氏が感じた危機感やシリコンバレーでの学びを少しでもみずほ銀行の改革につなげたいという熱い想いを拝聴した。

デザイン思考は、「イノベーションを生み出す人間中心のアプローチ」といわれており、顧客・ユーザーの側の視点でプロトタイプをつくり改良を続けていくプロセスで革新的な商品やサービスを生み出す課題解決の1つの手法である。

既存の商品やサービスが存在する場合は有効性があると感じたが、ゼロからイチを生み出す手法ではないと感じた。一方で、そのプロセスにおいて、否定をせずコミュニケーションを交わしたり、意見を述べるプロセスはチームの意識や結束を高める効果もあると感じた。

行政においては、デザイン思考のみにとらわれず、データ分析などから改良点を見出し、行動するロジカル思考と併用していく必要がある。



続いて、Apple Visitor Centerへ訪れ、Apple Inc.にてMacOSのGUI開発に携わる秋葉寛氏の講義を拝聴した。

アメリカではジョブ型雇用が中心であり 2 年単位で契約が更新となるので、各々の職員のモチベーションが非常に高いとのことであった。そこで、そのモチベーションの創出やどのように維持しているかと質問したところ、チームビルディングなども行っているが元来の 1 人 1 人の素質が非常に高いことが特徴の 1 つであると教えていただき、ジョブ型雇用の強いメリットを学んだ。

また、Apple に代表される新製品は、常に上役で決定しており、徹底的な情報管理がなされているため、何の製品のプログラミングをしているかは職員も知らないことも多いという点に、良し悪しはあれど特徴を感じた。



【3 日目】

Stanford University を訪れ、主任研究員 池野文昭氏による「大学概要説明及び起業家精神に関する」講義を拝聴した。

スタンフォード大学は、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ハーバード大学、カリフォルニア工科大学（ Caltech ）、マサチューセッツ工科大学（ MIT ）と共に、全世界屈指の英語圏エリート名門校の 1 つ である。

大学教授といえど、例外なくジョブ型雇用とされており、大学にどれだけの成果を還元したかで雇用の継続が判断されるということであった。

また、この日から Team-Takeuchi による班活動を本格的に開始し、スタンフォード大学内で学生等に Google フォームによるアンケート調査 (Questionnaire on pre-trip research) を実施した。

同時に過去最大の調査数 50 件を目指すことを班で決定！



スタンフォード大学での講義



大学内にある大聖堂



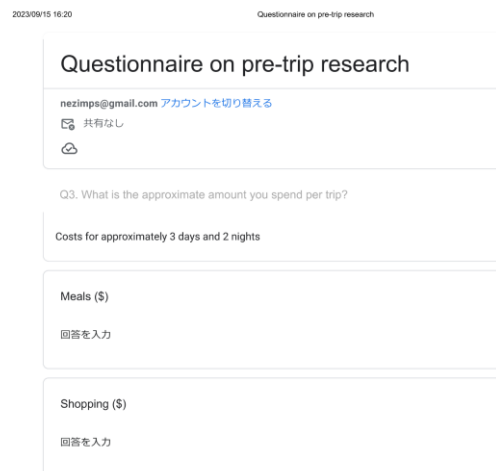
学生によるアンケート調査



自分も学生に混じってチャレンジ！



アンケートのお願い



アンケートの内容（一例）

【4日目】

班活動の続きとして、少し足を延ばし、サンフランシスコにある PIER39 と Japan Town を中心にアンケート調査を実施した。

サンフランシスコは様々な人種が同居する街であり、それにより生まれる歴史や音楽やファッション、食などの多様な文化があり、「観光（旅行）」という課題に対し、様々な方へ意見を聴けるチャンスが多い日でもあった。

全員がアンケートのコツを掴んできた様子が伺え、充実した1日を過ごすことができた。

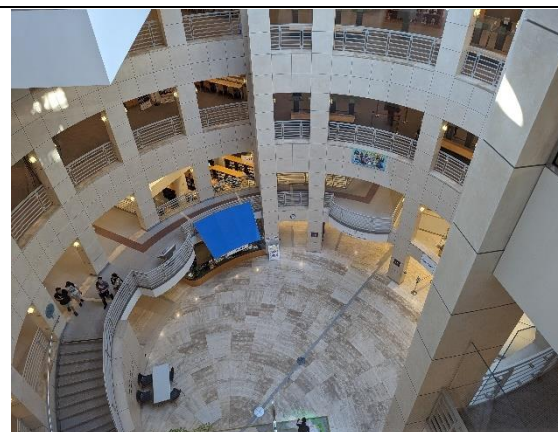
また、自身の業務上どうしても見学したい施設があり、学生に無理を言い、サンフランシスコの「City Hall」と「Public Library」の見学を行った。



アンケートの様子。学生も1人でアンケートにチャレンジしてもらった。



City Hall



Public Library

【最終日】

とうとう最終日を迎え、ホテル内にて最終プレゼンの準備及び発表を行った。

発表には、B-Bridge International Inc. と事業提携を行っている EXest 株式会社の事業に参加している日本の大学生も参加し、質問や意見を積極的に投げかけていた様子が印象的であった。



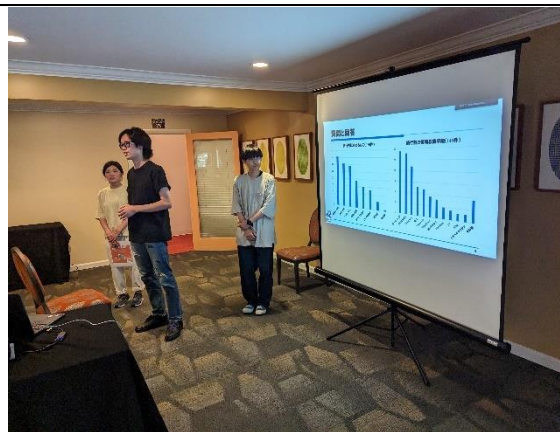
プレゼンに向けての資料準備の様子



発表を前に緊張が走る



Team-Takeuchi によるプレゼン発表



Team-Takeuchi によるプレゼン発表

【所感】

最初に、課題に取り組むにあたり Team-Takeuchi の切り込み隊長である池田君、冷静沈着な井村君、緊張しいですが抑えを務める今村さん、そして、まとめ役でユーモアと厳しさ・優しさを備えた鈴木先生に感謝申し上げます。

行政から第 1 号の参加者ということや自身の英語力が乏しいこと、少し課題が難解であったのではないかと、という危惧もあり当初は心配でしたが、このメンバーであったからこそ乗り切ることができました。

インタビューも日を追うごとに積極的に、プロアクティブにチャレンジしていく様子はとても嬉しかったです。

そして何より、市の職員として、小松市にある大学に通う学生が、市から持ち寄った課題

に対し真摯に取り組み、アメリカという遠い国の中で成長していく姿を間近でみることができ、非常に刺激を受けました。

この研修を通して、仕事における意識や考え方に一種の刺激を受けたことはもちろんですが、全8回の事前学習を含めてこれだけ長い期間、1つの課題に対し、立場の違う者同士が、膝を突き合わせて議論を重ねてきたことが何よりの経験となりました。

アメリカとの物価の違いをはじめ、現地で働く日本人の方々の話からも、日本の行く先について不安を覚えた学生もいたかと思いますが、だからこそ、年齢や身分、官民という枠組みを超えて対話をしていく経験から、まちづくりの本質を見出すことが出来ました。

最後に現地アテンドの B-Bridge 様、小松大学の先生方、学生の皆様をはじめ当研修に携わっていただいた方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

新しい自分を創る

株式会社文教コーポレーション 三田村 耕平

1 2023 年度産官学合同シリコンバレー研修参加の経緯

「企業の事業課題を学生と共に考えるプロジェクト」テーマに惹かれ、私が認識する当社の事業課題「提案・創造する力が不足している」を持ち込む形で参加した。

2 研修成果 - 課題解決へのアプローチ

本研修を経て、当チームは事業課題に対して ①新しい環境に身を置く②好きなことを見つける③失敗を生かす の3アプローチを見出した。

2.1 新しい環境に身を置く

「提案・創造」には、まず自分自身からの Proactive なアウトプットが必須となる。研修中行動を共にした未だ 10 代の学生でさえ、日本国内での慣習・常識の影響からか、研修初日は自己のアウトプットを抑制している印象を受けた。しかし日数を経るにつれ、自発的なアウトプットは著しく増加していき、印象は変化していった。その要因の一つはシリコンバレー（以下 SV）という新しい環境に身を置いたことだろう。

米国、その中でもイノベーションのメッカである SV では自己表現・アウトプットを Proactive に行うことがあらゆる前提となり、本研修では日本国内では体感し難い経験を得られる。「慣れ親しんだ居心地の良い環境から離れ、自ら世界へ踏み出し、Proactive なマインドセットへの自己変革を強制させる環境に身を置く」ことは、私自身の米国留学の経験を踏まえても、課題解決に向けて必要なアプローチであると共感できた。

2.2好きなことを見つける

現地で働く人々の多くに共通すると感じたことは「自分の仕事に関することをとても楽しそうに話す」こと。Googleplex でインタビューした Google Play エンジニアや、Uber ドライバーとして会話した医療向けウェアラブルデバイスのエンジニアなどが例であり、仕事の社会性、またそれ以上に日々スキルアップしている自分を誇りに思っている印象を強く受けた。

「好きこそ物の上手なれ」という諺のとおり、好きなことは自ら進んで勉強するため、好きなことを仕事にすることによりクリエイティブなセンスが磨かれると感じた。

2.3 失敗を生かす

SVでは「失敗を恐れない」というフレーズを幾度となく耳にした。それと同時にSVで疑問に感じたことは、「彼らは失敗を失敗と捉えているのだろうか?」ということだ。医学をはじめとするあらゆる学問は、幾千幾万の実験・トライアルアンドエラーの基に成立している。そのひとつひとつのエラーを「失敗」と捉えるだろうか?私の見解ではノーであり、成功に至るひとつのプロセスに過ぎない。

ひとつの失敗をした時に、それが単なる失敗になるか、若しくは成功に至るひとつのプロセスになるかはその個人の行動が左右する。このマインドについて本研修前にも肌感覚では理解し行動していたが、言葉ではっきりと表現・自覚できたのはSVにて学生と話していた時が初めてだった。この学びを与えてくれたチームメンバーには深く感謝したい。

3 新しい自分を創る

「イノベーション」という言葉には多種多様な解釈がある。前例のない取り組みをすること、既存概念を破壊することなどが挙げられる。そのような大仰なことを言わずとも、SVでも耳にしたが、今まで行ったことのないレストランに行くことや、買ったことのないような服を買うことなど、日常に少しでも変化を加えるマインドがイノベーターへ進む要件なのだろう。

日本という国は地理的にも孤立した島国であること、そして民族的にも大和民族が大多数を占める単一民族国家であることから、日常的な変化に乏しい。それも一長一短があるが、VUCAの時代と言われて早数年が経過し、「変化に慣れる」という一種のスキルは必須のものであるという思いは日々強くなっている。

本研修に参加した学生は、他人に言われて参加したのではなく、全員が自主的に立候補したと聞いて感嘆した。昨日までの自分から飛躍し、新しい自分を創りにいく。そのProactiveなマインドを、私自身も学生に負けず引き続き大切にし、かつ実践していこうと強く感じた研修だった。

最後に、本研修という貴重な機会を賜り、公立小松大学の皆様、小松市の皆様、B-Bridgeの皆様をはじめとするお世話になりました皆さま方に深く御礼申し上げます。

産官学合同 Silicon Valley 研修レポート

株式会社文教コーポレーション 岩崎直斗

【研修の目的】

文教コーポレーションが抱える課題である、「社員が新規事業を提案、創造する力が不足している」を解決するために、イノベーションの聖地である Silicon Valley で活躍されている方から話を聞き、課題の解決法を探ることを目的とし本研修へ参加した。

【各項目での学び】

■オリエンテーション

シリコンバレーという土地でのマインドと取るべき基本アクションを学ぶ。

Proactive (積極的) な思考が何よりも大切。気になることはすぐに聞く。チャレンジする。なぜ? という疑問を抱えたままではなにも解決しない。

■小松市長講和 (小松市長 宮橋様)

小松市のこれからと抱える課題について学ぶ。

当社の取引先でもある地方自治体の長から直接課題を聞ける貴重な機会であった。

小松空港と開業する新幹線駅が本州一近いことが強み。アクセスに自動運転を取り入れていくこと。自治体の特徴である縦割り組織の問題性が課題であるとのこと。

■デザイン思考の講話 (みずほ銀行 植松様)

みずほ銀行という日本最大級の金融機関を飛び出し、シリコンバレーのマインドを社内外に発信している植松氏の講話。

「デザイン志向」 デザイン思考は実践的かつ創造的な問題解決もしくは解決の創造についての形式的方法である。

デザイン思考は最初に発散思考 (divergent thinking) によって可能な限り多くの解決を探り、その後で収束思考 (convergent thinking) によってこれらの可能性を一つの最終案に絞り込んでいく。

デザイン思考の特出する点は、実現可能性に関わらず解決を探るために、チャレンジの土壤が生み出されること。デザイン志向を用いることによって PDCA サイクルが強制されるためトライするスピードが圧倒的に早い点。

■Apple visitor center (Apple エンジニア秋場氏)

Apple 本社に併設された visitor center を訪問し見学。エンジニアとして Apple で勤務されている秋場氏より現地の働き方について講和いただく。

周知のとおりアメリカといえば job 型採用がメインであり、終身雇用を提言していた日本

にもその考え方が浸透してきている。

採用時の面接官は7名程度が担当し、一日出社し、エンジニアとしてのスキルをひたすらに診断される。Job型採用を取り入れるには採用側の姿勢についても変化が必要である。

■スタンフォード大学視察（スタンフォード大学・主任研究員の池野氏）

スタンフォード大学という世界でも有数の大学の在り方を学ぶ。大学といえどもかなりビジネスに特化しているように感じた。教員の評価や契約更新についても外部から（企業等）の評価が重要視される。

大学内は空間がゆとりをもって利用されており、自由に使えるワーキングスペースが配置されている。

また、医学系と工学系が結びつくことでイノベーションが生まれる。と考えた方々が2つの学部を結びつける方法をディスカッションした結果、間に食堂（カフェテラス）が設置された。

キャンパス内はある種観光地的になっており、カフェテラスやショップはかなり充実している。特にショップについては大学オリジナルグッズが大量に販売されており、学生たちもスタンフォード大学グッズを身につけている姿が散見された。

■Fogarty Innovation at El Camino Hospital（三菱商事 若狭氏）

非営利のインキュベーション企業。

病院内の1フロアを企業が使用し、その中にスタートアップ用のスペースを確保している。

病院の中で調査や知見を行う、捨てる医療材料を開発に利用できる等のメリットがある。

病院としても最先端の医療を取り入れていかなければ成長できず、生存競争から蹴落とされてしまう。スタートアップ側にも上記他多数のメリットがあり、病院、スタートアップ企業との協力体制に無駄が無く、効率的な企業であった。

■Pegasus Tech Ventures

日本のマーケットをメインターゲットとしたインキュベーション企業。

投資先はスペースエックス、アイシン、マネーフォアード等。

イノベーション講座の提供や、スタートアップワールドカップの開催など日本発ビジネスを全面的にフォロー、投資だけでなく事業提携などの形でも支援を行っている。

■Triple Ring Technologies

アイディア、ラボでの開発、プレリリースなどを一気通貫で行う医療関連専門のインキュベーション企業。スタートアップをゴールであるバイアウトまで全てフォローできることが特徴。

ディスカッションの中で、最初からバイアウトを目標としているところが日本企業との相

違点であった。

■公立小松大学生によるファイナルプレゼン

文教が掲げた企業課題である【社員の提案・創造する力が不足している】を Silicon Valley での経験を通し、大学生が解決策を提示。大学生をサポートしプレゼンを限られた時間で作成していくことは貴重な体験だった。

【研修を終えて】

本研修は産官学という三者が合同で同一の課題解決に取り組むという通常の業務では体験のできない貴重な機会でした。

Silicon Valley では論理的思考に基づき課題解決に向け最短の道を選択する点に特に感銘を受けました。また、日本企業の特徴や強みを客観的に知る良い機会となりました。

本研修で学んだ経験を積極的にアウトプットすることが最大の学びであると感じ、研修に参加していない社員への研修報告会、デザイン思考のワーキングを開催しこの貴重な経験を活かします。

最後に、本研修という貴重な機会を提供いただいた公立小松大学の皆様、小松市の皆様、B-Bridge の皆様をはじめとする皆さまへ心よりお礼申し上げます。



シリコンバレー研修 報告書

代表取締役社長
高瀬 敬士朗

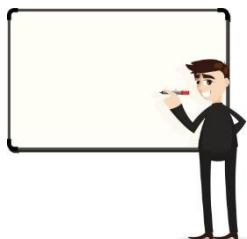
シリコンバレーの競争社会≒エコシステム

完全なジョブ型雇用（例）スタンフォード大学教授、アップルエンジニア
シリコンバレーでは、白人が 33% アジア系 35% ヒスパニック系 25%
（米国全体では、白人 76.3% アジア系 5.9% ヒスパニック系 18.5%）

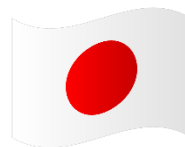
東京大学未来ビジョン研究センター（IFD）安全保障研究ユニット（SSU）より

2020年人種構成	白人	アジア系
Google	51.7%	41.9%
META (Facebook)	41%	44.4%

採用試験（ジョブ型とメンバーシップ型）



基準：技量、コミュニケーション能力



基準：良い人、作業が早い

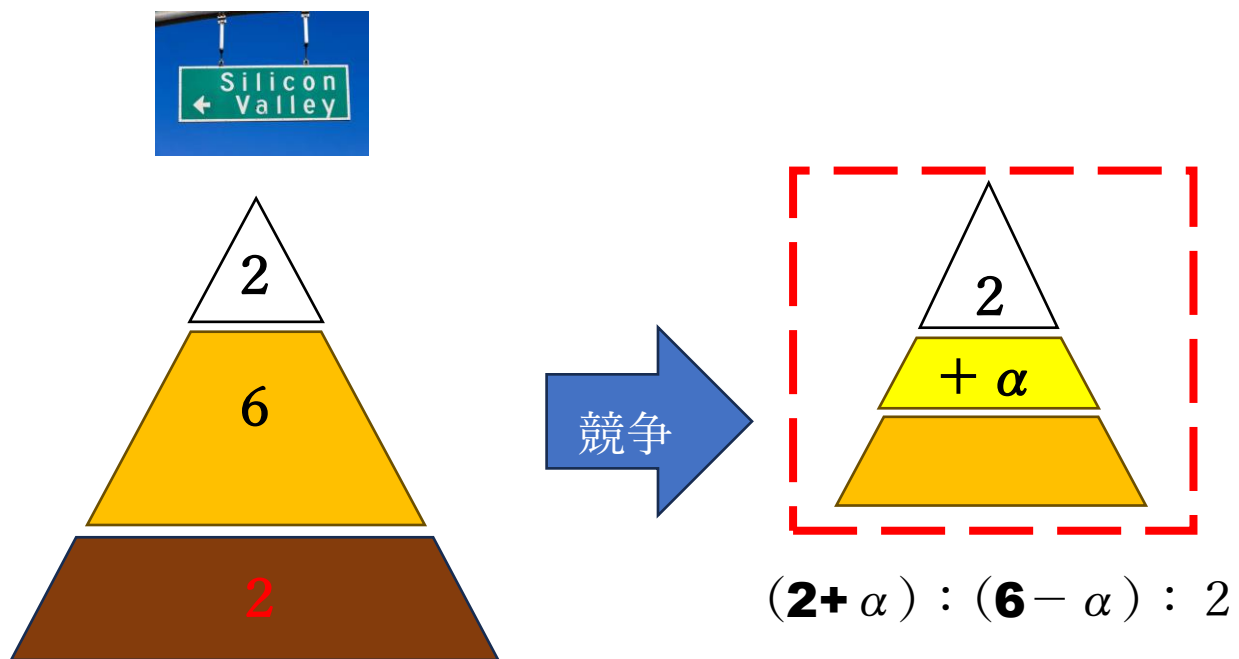
特定技能実習生は
ジョブ型雇用
「日本人より真面目に働く！」

2:6:2(3:4:3)の原則

どんなグループでも2割の優秀なグループ、6割の協力者(普通の人)、2割の非協力者(低生産性)グループに分かれる。

シリコンバレーでは、6割の中で競争(エコシステムと呼ばれる)があり、優秀な人材を競争育成しており、優秀な人材が $2 + \alpha$ と増幅する。

一方、日本国内では、競争による育成は少なく、 $+\alpha$ がほとんどない。これが国力の差になると思う。



日本の優秀な【2割】のグループはどんな人？

- ・ 戦後復興世代は「這い上がる人達」・・・自然競争から生まれていた。
- ・ 専門性の高い人「専門⇨仕事が好き」・・・好きな事を仕事にしている人。飛行機が好きだから関連職種、音楽が好きだから、サッカーが好きだから、大好きな果物を販売
- ・ 責任感の強い人・・・目標設定できる。ゴールイメージが想像できる。

日本の近年の教育方針、世間常識から考えると競争から優秀な【2】は育ちにくい。仕事や職場などを好きになる事が、高い戦闘力を身に付ける方法ではないか！
よって、企業は気持ち～環境を提供することが優秀な【2】を獲得する、育成する手段ではないかと感じた。

シリコンバレー研修についての学んだこと

株式会社味一番フード
専務取締役 村上 良一

私は事業経営を通して昨今（特に新型コロナウイルス以降）の社会は物凄い勢いで変化していることを肌感でヒシヒシと感じており、従来の常識や価値観ではこれからの未来に適応出来ない危機感を抱き世界の変化を常にリードしてきた GAFAM が、アメリカのシリコンバレーに集中しているのに地域の特異性として何か特別な何かがあるのではないかと興味を以前から持っていました。そこで以前からご縁があった株式会社ライオンパワー・高瀬社長からのお誘いで公立小松大学でのシリコンバレー研修を知り「これも何かの啓示か」と思い参加を決意しました。ただ日程後半には日本に帰国することになっており、必ずしも全てのカリキュラムに参加した訳ではありませんでしたが、自身にとっても今回の研修は相当な学びを得た体験となりました。その学びについて詳しく記していきたいと思います。

① アメリカと日本との働く意識の違い

今回現地でお世話になりました B-Bridge の榎本さんも仰っていましたが、アメリカでは成果を出すことが重視されており期限を区切って具体的な結果が求められており、仮に成果が出なかった場合には携わっている方の解雇なども日常茶飯事にあり、昨日まで一緒に働いていた同僚が次の日には職場から消えていたという事例も珍しくないとのこと。スタンフォード大学の主任研究員である池野氏を訪ねた際にも大学とは基本一年契約でありスタンフォード大学にとって何かしらのメリットがない限り何年も契約を更新していくことは出来ないとの話を聞き、日本の大学との大きな差を感じました。

ただ、日頃から企業経営に携わっている私から見ると、必ずしも結果が出ないことで解雇されることが良いという訳ではありません。それでも「義務と権利」という視点に立てば、企業の目指すゴールに共感共鳴し共に企業価値を高めるという前提で集まった仲間であるなら経営者側は働いてくれる人達へのサポートや権利を受容するのは当然として、一方の働く側についても企業成長のための何らかしらの「成果」を出すという意識も当たり前が必要であり、互いがゴールに向けて協力していく緊張感という点では、むしろ健全な労使関係が成立しているという日米の雇用環境の大きな違いが強く印象に残りました。アメリカ視点では、言葉は適切ではないのかもしれませんが、日本は社会主義的なほどに労働者側が守られ過ぎており却って労働意欲という点で悪循環になっているような気さえ感じました。



池野氏を訪ねたスタンフォード大学

② 会社と個人の対等な関係

実際に Google 本社や Apple 本社の環境や、Apple システムエンジニアである秋場氏からも話されていた①のような、ある意味厳しい雇用環境があるとは言え、企業側が成果を求めるとして各人や各プロジェクトの業務プロセスにはあまり口出しや干渉をしない点も違いとして印象に残りました。

成果にはこだわるが、成果の出し方や成果を出すために各人の考えを尊重することや労働環境という意味では理解があり、むしろ成果を出しやすくするために、特に職場や各人ごとの就労条件など会社と働く個人が対等な関係として築けており、ギブアンドテイクのアメリカらしい契約社会の一端を垣間見ることが出来ました。また秋葉氏から必ずしも職場内チームワークが良い訳ではなく、個性的な各人が今のところ絶妙なバランスの上に成り立って成果を出しているという点についても興味深く話を聞かせていただきました。



現地で訪れた企業

③ シリコンバレー的考え方

みずほ銀行デジタルイノベーションマネージャーの植松さんにお話しいただきました、イノベーションのためのデザイン思考の考え方や、シリコンバレーの仕事観などもとても刺激を受けた時間でした。デザイン思考については割愛しますが、Apple

創始者であるスティーブジョブズなども用いたイノベーション的製品開発の際に、社会の顕在的欲求ではなく、潜在的欲求について理解することを前々がどのような手法で行うのか興味をもっていたので今回、具体的行程を体験することが出来、非常に興味深い体験となりました。

特に印象に残ったのは、シリコンバレーでは敢えて考えることへの時間的制約を設け、失敗しない方法（考え）を求めていつまでも考え続けるのではなく「失敗を前提とした思考」から限られた時間でのアイデアを即実行することを通じ、検証や気づきの改善サイクルを高速で回していく点について非常に共感することでした。いくら最先端分野を扱っている企業といえども、その本質は決してスマートなものではなく、失敗にめげずにタフに改善や気づきを繰り返す「どこか泥臭い」ものであるという点が親しみ感じましたし仕事の本質だと理解できた次第です。

またこれはアメリカ全体の「失敗についての考え方」になりますが、日本のように失敗を恐れ、ミスをしてはいけないという守りの考えをするのではなく「失敗したならまたやり直せばいい」という寛容な風潮に失敗を学びや気づきと絶好の機会と捉え、次のリカバリーするチャンスを与える社会であることが、シリコンバレーはもちろん大きな視点で言えばアメリカの大きな成長力の根源だと腑に落ちました。



Apple Park Visitor Center の模型

④ 様々な人達との出会いと気づき

今回は当社の企業課題について、公立小松大学の学生さん達にイノベーションの先端の地のシリコンバレーの中心的存在であるスタンフォード大学内や、Google 本社敷地内にいる人達へのインタビューを行い、その内容を基に課題解決の提案やヒントを授けていただきました。このこと自体、常に会社の内向きでしか課題を見つめられない私自身にとって気づきや新たな発見が出来、感謝しております。また彼らのたどたどしい英語力ながらも、懸命に見ず知らずの人達にインタビューを行っている姿は、日常から当社店舗で働いているアルバイトの子達を知る立場として、どこか若者への凝り固まった自身のネガティブな固定概念を覆してくれ、逆に感動さえ覚えるものでした。まだまだ日本の若者も捨てたものではありませんね。

それ以外にも今回は産官学連携というのもあって、宮橋小松市長のエネルギーに満ち溢れている言動、山本学長の大学を更に充実したものにしていこうとする意欲の中にも、学生への優しい眼差し思いに触れることが出来、従事をされた皆さん、それに企業側として共に参加したライオンパワーの高瀬社長をはじめとした経営者の皆様など多くの人達との交わりの中で常にポジティブな影響を強く受けており、このメンバーと参加出来たからこそそのかけがえのない日々であったと深謝しております。



現地で過ごした街並みと宿泊施設

以上が、簡単ではありますが、私が学び得たこととなります。最後に、今回のシリコンバレー研修を終えての総括として実感するのは、当社社員にもよく話すことですが、改めて「わかるとできる」では大違いだと強く認識しました。上記した気づきや発見というのは、何もシリコンバレーに行かずとも様々なネット等の情報から理解できるものです。しかし、仕事と同様で実際に頭で理解しているからと言ってすぐにそのことが実行出来るかは別の話になります。それは脳が想像の域で理解しているつもりでも、実際のリアルな体験には何の役にもたたず、ある意味脳が偽りの分かった気（理解）に錯覚しているだけです。今回の研修で現実にシリコンバレーに赴き、実際にそこで様々な方たちとの交わりや懸命にインタビューをしている学生の姿を直視する経験が出来たことで、実体験から学び得られた腑に落ちた経験から大きな財産を得たという実感があります。頭だけの理解ではなく自らがその場に行くことや実際に行動をするからこそたどり着ける、本質的理解を得ることに大きな意味があるのだと痛感させられました。今後も積極的に様々な世界に出向き、そして体験価値を重ねることをリアルな理解を広げていけたらと思います。

また、海外から日本を眺めるという視点でも、世界と日本の良し悪しを含めた違いについて肌で感じる事が出来、今後の事業のあるべき在り方や従業員への思いなど含め未来へのヒントを多く頂けたことも合わせて記しておきたいと思います。

最後に、僭越ではありますが、参加した立場から今回の研修への提言をします。研修への企業側の参加希望者が少ないとの話を耳にしました。企業経営者として商品やサービスの認知をどう高めていくのか？を常に考えている身から、この辺りの発信の中身や方法をよく練っていく必要があると感じました。公立大学であるため地元企業を中心に企業を募る

のかなと思いますが、このような素晴らしい研修なら石川のみならず北陸全体に広げてみてはと思います。企業として成長や気づきを求めている経営者は多く存在していると思います。地域性よりも企業側の意識や質を優先したPRや認知活動をどのように行っていくのか。まだまだ多くの情報の中に埋もれているように感じますので研修の特徴や良さをどう形式化された情報として広く認知してもらうのかを検討してみてもはと思います。

また様々な理由で致し方ないことなのかもしれませんがカリキュラムや時間帯が突然変更になるなど、この辺りへの配慮や変更の可能性含めての情報共有にもっと気を配っていただければと思います。

以上になりますが、何かと内向きな日本人が増えている昨今で、それこそプロアクティブに学び行動が求められる公立小松大学のシリコンバレー研修が更なる魅力を増して、小松から北陸を通して、日本から世界に発信するくらいの素晴らしい研修や大学になっていくことを祈念しております。

今回、本当にこのような貴重な機会を頂きありがとうございました。

シリコンバレー研修報告

生涯学習課

事務員 下坂 翔太郎

令和5年8月19日から24日まで公立小松大学産官学合同シリコンバレー研修に随行しましたので、下記のとおり報告します。

記

- 1 出張期間 令和5年8月19日(土)～24日(木)
- 2 出張都市 アメリカ サンフランシスコ/シリコンバレー
- 3 日程表 別紙のとおり

訪問の状況

8月19日(土)

サンフランシスコ国際空港到着後、株式会社B-Bridge代表取締役社長榎本氏に運転していただき、サンフランシスコ市中心部を車上から見学しました。道中、榎本氏からサンフランシスコ市の概要や歴史、完全無人の自動運転車の普及、アプリで駐車スペースの予約と支払いが可能な駐車場予約サービス等の説明を受けました。

ゴールデン・ゲート・ブリッジ及びピア39の見学後、ジャパントウンを視察しました。ジャパントウンには200以上の中小企業があり、日本食レストランや本屋、生活雑貨店等が数多く営業しており、日系コミュニティの文化的中心地となっています。生活雑貨店には焼き物や着物、手ぬぐいや金物等多くの種類の日本雑貨が販売されていました。榎本氏によると、ジャパントウンで印象に残った商品を見て、現地で生産された商品を探して日本に行くアメリカ人もいるとのことでした。

ジャパンセンターでは、小松市、飛騨市、南砺市、高岡市、氷見市の5市連携によるクラフトバレーフェアを令和4年10月に開催し、各市の文化や特産品等の情報発信を行いました。現在は愛媛県がブースを構え、しまなみ海道サイクリングや観光文化施設等のPRコーナーがありました。

午後9時30分より、宮橋市長は第2回こまつりビングラボに宿泊先ホテルからオンラインで出席し、NTTコミュニケーションズ株式会社の「自立走行型パーソナルロボット temi」を通じて挨拶しました。



自動運転車



ジャパンセンター



セレクトショップ



日本製の商品が揃う

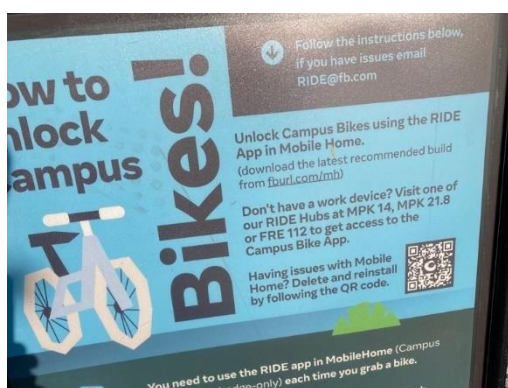
8月20日（日）

午前中はMeta, Google, Appleの外観を見学しました。Metaには従業員の移動用に自転車が設置されており、アプリで自転車を利用することができます。自転車はMeta敷地内でのみ利用可能であり、敷地外に出ると自転車ではキャンパスに戻ることができない仕組みになっています。株式会社B-Bridgeの槇島氏によると、アメリカでは自転車に乗る際はヘルメット着用が義務化されていることからMetaのシェアサイクル地点にもヘルメットがありました。石川県ではヘルメット着用は努力義務となっていることから、小松市のシェアサイクルにおいてもヘルメットの取り扱いを検討すべき点と感じました。

Googleは、業務時間内に自分のやりたいことをやる時間を設けるシステムがあり、常に新しいことに挑戦していると槇島氏から説明を受けました。実際、GmailはGoogle社内で

利用していた連絡ツールが便利だったことからリリースされました。

午後はナパバレーにある Del Dotto Winery を視察しました。Del Dotto は、異なる種類や産地のブドウを使用したワインを開発するだけでなく、ワインを熟成させる樽にもこだわっています。試飲では同じ種類のブドウですが、アメリカやフランス産の異なる樽で味わいを楽しめるプログラムが入っていました。商品を単に紹介するだけでなく、ブドウや樽の種類、そしてワイン貯蔵庫の見学等を通じて、ストーリー性をもってワインを紹介しており、ストーリーを持って商品を PR することは日本においても活かせる点だと感じました。



Meta 内の自転車利用方法



自転車とヘルメット

8月21日(月)

宮橋市長は、公立小松大学生や AOKI 起業家育成プロジェクトに参加している横浜市の中学生等約 50 名に小松市の施策に関する講演を宿泊ホテルの会議室で行いました。学生からは、大型バスでの自動運転実証試験、宮橋市長が政治家を志した理由等について質問がありました。

植松裕貴・みずほ銀行デジタルイノベーションマネージャーは、シリコンバレーのマインドセットについて講演しました。課題に対して様々なアイデアを出し合い、ベストな案を絞り込んだうえでアイデアを形にする(プロトタイプをつくる)。アイデアを目に見える形にすることにより、文字や言葉で説明するよりも直感的に理解しやすくなり、意見交換が活発になる。この繰り返しはデザイン思考であり、より良い商品やサービスの提供につながっていきます。

午後はサンフランシスコに移動し、野口泰・在サンフランシスコ日本国総領事と面会し、シリコンバレーにおけるスタートアップ企業の現状や課題、小松市での創業支援施策

の展開等について意見交換しました。

その後、DNX Ventures を訪問し、北村充崇 COO と懇談しました。DNX Ventures はシリコンバレーと日本をつなぐスタートアップ投資に特化したベンチャーキャピタル企業であり、2011年の創業以来、総額250億円以上を日米合計80社以上に対して投資してきたほか、出資者である日本企業とスタートアップのパートナーシップ構築及び協業サポートを累計100件以上で実施しています。

北村氏は、「スタートアップ企業を誘致しようとする自治体は数多くあるが、単なる誘致では企業が進出することはない。逆に、自治体が直面している社会課題の公表やデータの提供、実証実験の場を提供することで、他の自治体との差別化ができる」とアドバイスしました。宮橋市長は、「小松市はオムロン株式会社と包括連携協定を結んで高齢者福祉サービスの向上に取り組んでいる。オムロンとの連携事例のように、小松市が抱えている課題に対して、企業の知見を活かして連携をさらに広げていきたい」と話しました。



山本学長のあいさつ

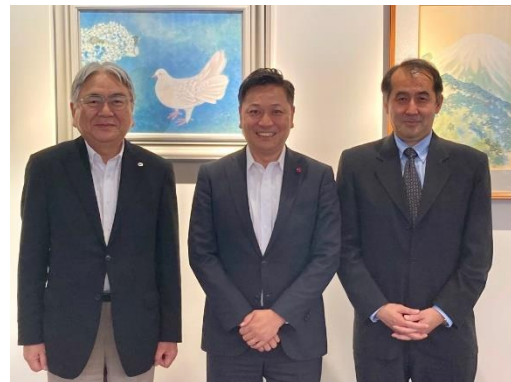


宮橋市長の講演



DNX Ventures 訪問

8月



野口総領事との意見交換

午前中はスタンフォード大学を訪問し、主任研究員の池野文昭氏からスタンフォード大

学医学部キャンパスの説明及び起業家精神に関する講演を聞きました。池野氏は小松大学生に対して、「人生を変える出来事に積極的にチャレンジしてほしい。夢をよく考えて、目標に向かって頑張してほしい」と話しました。

その後、Fogarty Innovation を視察しました。Fogarty Innovation は病院のワンフロアを間借りして、スタートアップ企業に活動拠点や教育を提供しています。現在、約 20 社のスタートアップ企業が入居し、約 40 名の専門家がビジネススキルや事業展開の支援を行っています。アメリカの病院ではスタートアップを支援して収益拡大を図るのが一般的であり、また、イノベーションなくして高度医療を維持できないと認識しているため、積極的にイノベーション企業を育てています。Fogarty Innovation は、起業にあたってのビジネス能力だけでなく、製品を説明・発表するプレゼンテーションや、チームコミュニケーション等の社会人にとって重要な基礎能力の教育にも力を入れているのが印象的でした。

午後は Pegasus Tech Ventures を視察しました。ペガサス・テック・ベンチャーズは、事業会社とベンチャー企業をつなぐことにより事業拡大・新規事業を創造しています。現在、39 のファンドを運用、世界での投資実績は 255 件以上、スタートアップ企業との提携実績件数は 200 件以上、運用総資産額は 3,000 億円です。

宮橋市長は、アニス・ウツザマン CEO に対して小松市の概況を説明しました。アニス代表は、「世界中のイノベーションはシリコンバレーから生まれている。ここで受けたインスピレーションを持ち帰って、小松市に戻ってから頑張してほしい」と小松大学生に話しました。また、「2019 年 10 月に福岡県飯塚市でピッチコンテストを開催した際には 500 名が参加した。小松市でピッチコンテストを行う場合は連携できることもあるし、その時は B-Bridge 代表の梶本氏を通じて連絡してほしい」と述べました。

ペガサス・テック・ベンチャーズの次に Triple Ring Technologies を訪問しました。同社は 2004 年に設立し、シリコンバレーとボストンにオフィスがあります。100 人以上の科学者、エンジニア、デベロッパー、デザイナー等のスタッフがいます。医療分野における課題をデザイン思考でベンチャー企業と共に取り組むのがトリプルリングの特徴です。

デザイン思考の例として、スタッフが医療現場で医師や看護師の業務を観察し、抱えている問題や求めていることを考えます。そして、それを解決するためのアイデアを様々な視点から考えていき、商品開発部門やマーケティング部門、法律家やエンジニア、医者や

看護師と討論し、様々なアイデアを最終的に絞り、試作品を作ります。作成した試作品を医療現場で実際に使用してもらい、フィードバックに基づいてアイデアの改善・試作品の修正といった作業を繰り返します。



スタンフォード大学訪問



Fogarty Innovation 訪問



Pegasus Tech Ventures 訪問



Triple Ring Technologies 訪問

所感

ベンチャーキャピタル企業の見学は、新規事業を創出し社会を変革するためのマインドセットを強く感じるものでした。そして、自治体を持つデータや実証実験の場をスタートアップ企業に提供することにより、技術やノウハウを持つスタートアップ企業は新しいビジネスモデルやサービス、製品を生み出すことができます。小松市は既に様々な企業と包括連携協定を結んでいます。今後も継続して企業と連携して地域課題に取り組むことにより、効果的な対策を行うことができると感じました。

また、デザイン思考の学びを通じて、問題解決に対する新たな概念を理解することができました。公務員の仕事は多くの場合、市民や地域の問題解決や福祉サービスの提供に重点を置いています。デザイン思考に基づいた新たな視点と手法で考えることは、市民サービスの質の向上につながると感じました。